

71
489



始



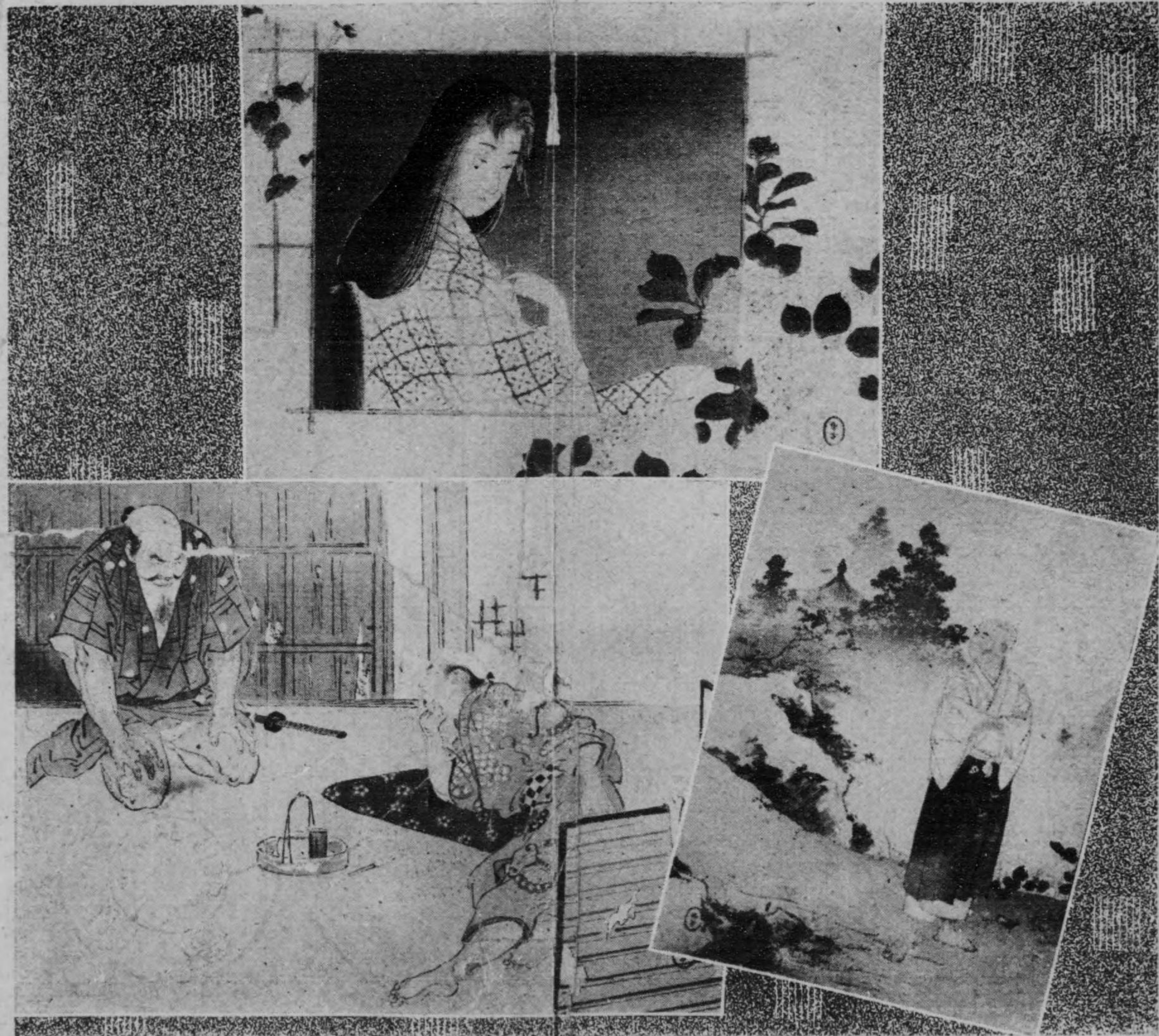
71-489



信
全集

第十一卷

大正
10. 6. 30
購求



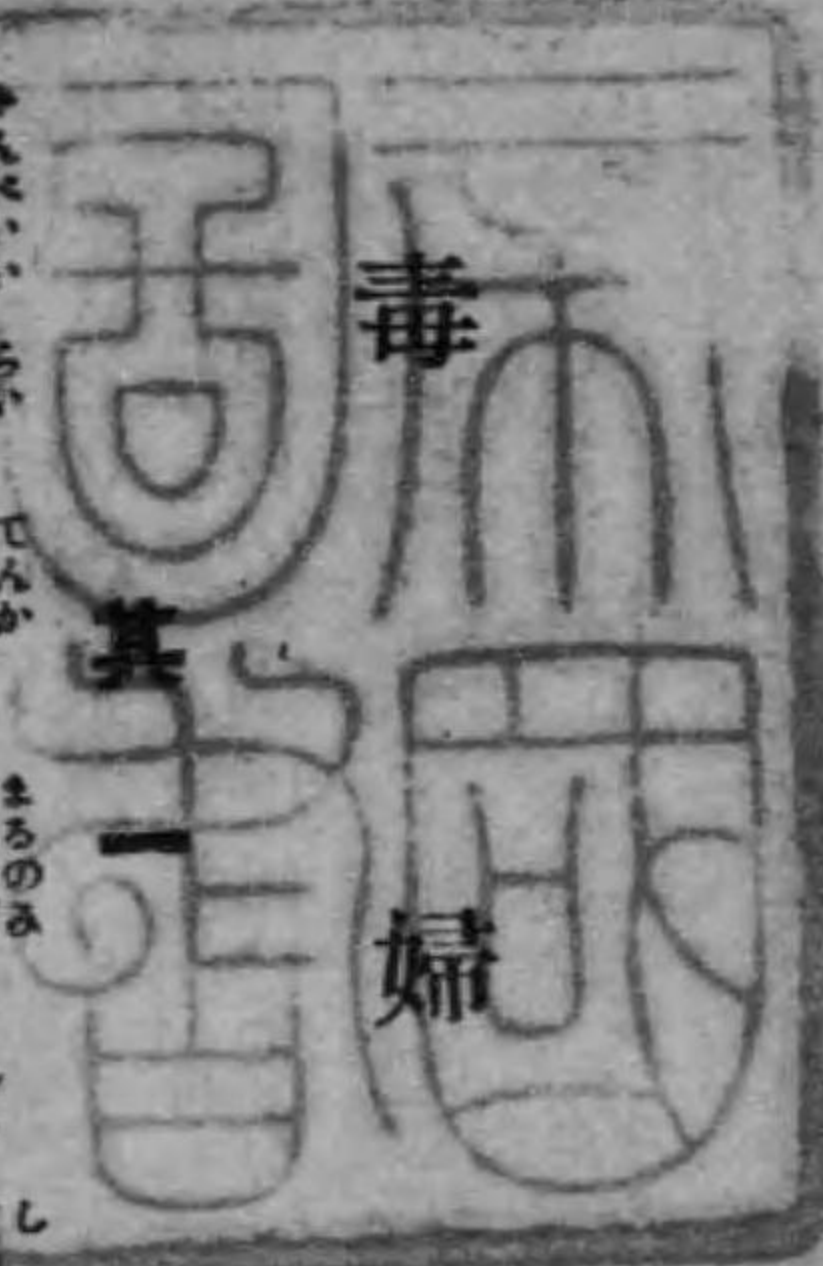
目次

一 毒 婦	一
一 毒 婦 後編	一五
一 毒 婦 續編	二五
一 仍 如 件	三九
一 仍 如 件 後編	四七

浪六全集

第拾壹編

浪六著



源平以來の天下を丸呑にして四海の侯伯を千代田の城門に膝行頓首せしめたる幕府三百年の威勢を、たゞ江戸繁昌といふ俗語の四字に包んで何の理由もなく仔細もなく、上下もろとも参りの太平樂に腹鼓を打って、怖ろしきものは佛法と鐵砲と女房の外に現世からなる地獄の沙汰と唄ひし傳馬町の牢屋敷に、破損の普請と建増の入札ありと言ひ傳へしかば、なる

毒婦

ほど追へどもく家に荒れ廻る鼠算の世諺、國には悪人兇狀持、かくても滅らぬ世の中と今更に驚かれぬ、

六親眷族の涙に送り出す棺桶を作りて人の憂ひを身の繁昌に千客萬來を祈る渡世もあり、それを喜び迎へて北邙一片の煙とすべき火屋墓原の請負普請もあれど、これはまた眼前に見る地獄の宿の阿責普請、生きながら阿鼻叫喚の囚獄を作る破損建増とは、人の全盛に連れて目出たき出世の第一に用ひらるゝ大工の身として、いかに内々の利分ありとも職業冥利に盡き果つべしと、いづれも流石に身の末を恐れて引受くるものなき折しも、本所龜澤町に親重代の大工棟梁、しかも其道に名を得たる彌兵衛といふもの、真先に馳せ付けて身元の入金もろとも一番札を差入れぬ、

理窟は理窟、利潤は利潤、あの龜澤町の彌兵衛が飛付いて一番札を差入れし上は、獄裡に苦

しむ科人の執念も怨恨も身の末おそろしき大工冥利も彼奴が一人で背負ひ込んだり、いざや人柱の立った後ぢや犠牲の出た後ぢや、罪も報いもない金の掴み次第に遠慮すなとて、俄に争ひ競うて札を入れしもの江戸市中より三日の間に四百六十三通となりしかば、かゝりの役人いづれも呆れて眼を見張りぬ、

先例によりて入札は一番より二十五番までと定め、その二十五人を定日に呼寄せて一時に開けば、かくても氣持の善からぬ普請と互の心底を見込んで自然に競上けたる案外の高札、木口で偷むか工手間で盗むか勘定高でしてやるかの差別はあれど、いづれも同じ一筋の慾深どもが最初の尻込思案に似もゝらで、今は囚獄の罪人に輪をかけたほどの強慾なる中に、かの一番札を差入れし龜澤町の彌兵衛が見積高は他人の半分以下、せめて十のものを八か九といへば猶その邊に多少の仔細もあり普請の巧拙もあれど、みすく誰が目にも百兩かゝるべ

きところを思ひきつて五十兩とし、抛け込んでも十兩前後の見當を五兩に切落したる體、か
かりの役人おもはず眉を擧めながらも一應は入札の手前、まづ彌兵衛を落札と定めぬ、

牢屋敷普請が、りの役人に呼出されたる龜澤町の大工彌兵衛は今年五十三、花は昔の梅千阿
爺といふほどにはあらねど、もはや兩の鬢に霜降る心も秋の暮に名残の額際を照して、左右の
腕首まで雄龍雌龍の黒雲舞下りたる自慢の文身も、今は浮世の年甲斐に袖を長くして押隠し
つゝ、普請の細目に見積書と繪圖面とを持ち添へて罷り出でぬ、

「これ彌兵衛、今度の牢屋敷御普請に就いて江戸中の大工どもが、いづれも異な事を氣に致
して進まぬ中に其方たゞ一人、第一番に駆付けて入札せし段いかにも神妙に存するぞ、しかし
落札の表を見れば他の者が見積高よりも半分以下とは、餘りの相違ぢや、もし御目録の仕様書

を寫し誤つたのではないか、但し算盤珠を弾き損ねて桁を取違へたのではないか、外々の普請
とは違つて大切の御政事向に係はるべき天下の罪人を容るゝ牢屋敷の事、萬が一にも手抜な
ど致すやうの義あつては後日に我等が無調法、とりわけ其方が越度となつて輕からぬ事ぢや
ぞ、今度の第一番に馳せ参じた志に免じて今のうちならば我等内分に含み置く間、逃札は今
ぢや、次の二番高に落しては如何ぢや」眉を擧め言葉を和らけて諭すが如き二人の役人を、
彌兵衛おそろく額越に見上げて思はず膝を進めながら、「數ならぬ彌兵衛奴を思召して有難
き仰せ、また格別に御心添を下さります段々、恐れ入りますれど、親重代の大工を家業と
致して今年五十三歳まで人並に世間を渡りましたるもの、その道にかけて御目録の仕様書を
見違へまする筈もなく、また手前算勘の積り損ひも仕りませぬ、まして上の御普請に對し手
拔手落などとは以ての外、全く落しましたる札の表高にて屹度御用相勤めまする間、何卒落

毒婦

札通り此彌兵衛に仰せ付けられたく、もし御疑念も御坐りませうならば身元金を三倍五倍に致し、御普請中に不埒の義を御見當り次第その場に於て御取上げ遊ばさるゝとも、また御普請成就の上にて無調法の義も御坐りますれば、憚りながら上を欺く大罪人として御存分の御科に仰付けらるゝとも、夢さら決して厭ひませぬ心底「いや、落札の其方、今更ら誰彼といふべき場合ではないが、他の者どもに較べて餘り案外の下直に聊か不審いたしたばかりぢや、しかし現在の其方がそれほどまでに申すからは、いかさま世間普通の大工どもが従來の強慾に引替へ、なるほど眞實正直の功者に見積つたものであらう、さらば彌兵衛、しかと申付けたぞ、くれぐれも念を入れて萬事に疎略ないやう致せ、首尾よく御普請の濟んだ上は、我等また申上げて御褒美を下さるゝやう取計らうて遣はずぞ」重ねく有難く存じまする、御目録の仕様書に照して寸分の相違いたしませぬは勿論のこと、お定めの日限中に假令火の雨が降

りませうとも、この彌兵衛が九死一生の大病に取付かれませうとも、決して見苦しく日延の追願ひなどは仕りませぬ覺悟「いよく男、大工風情には惜しいものぢや」「いや、その御言葉は、恐れながら御普請成就の曉に戴きたう御坐ります」

多年出入場の受持普請は格別、いざ競うて入札となれば、これまで何處の札にも落した事のない彌兵衛奴が、しかも氣持の悪い半屋敷へ一番に飛び付いたのみか、今度に限りて我等より半分以下の見積りとは不審千萬、たとひ入るだけの材木を無價で貰うても工手間に足らぬ案外の下直、あの落札高で目録通りの普請が何としてなるものぞ、役人の袖の下を潜るか素人目の届かぬ片隅を抜くか、人は外見によらぬ内證の苦しきまぎれに一時の金を吞込む手段か、いづれにしても曲物、この三事のうち一事は逆も外れまいとて、取残されし二十四人の大工ど

もが息を殺し、眼を見張ッて見物せしに、三十五日間と定められし日限までもなく、晝夜を急いで二十七日間に仕上げたる破損の修繕と建増の内外を見れば、さても不思議や天晴れ美事の成就、それ〴〵掛りの役人も立合うて目録に引合せ、普請奉行の見分も褒美の言葉に濟んで、何處に一點こゝといふ鏝の打込む隙間もなければ、今まで片唾を呑んで心に冷笑ひし二十四人おもはず舌を巻いて驚きながら、なほ不審の眉は晴れずして頻りに小首を傾け合ひぬ、言渡されし日限に八日を早めて成就せしのみか、差出されし日録仕様書に照して更に何の越度もなく、いち〴〵存外の念を入れて端々に至るまで心を用ひ氣を配りたる體、古今未曾有の大工ぞとて、かゝりの役人申し合せ奉行よりも褒美の品を下されむとする時、彌兵衛うや〴〴しく辭退を申し上げて後、あつたためて願ひ上げたき一義ありといふ、さらば呼出せとて、初めに案内下直の不審を打ちし役人對坐して問へば、彌兵衛いよく身

を縮めながら謹んで申上げぬ、今回、仰付けられましたる御普請の義、なるほど、聊かの相違は御坐りますれど他々二十四人の大工どもが見積高は全くの世間普通、この彌兵衛の落札高は最初より半分以上の損毫を覺悟の前にて、わざと御請負申上げましたる次第、かつまた有難き御褒美まで御辭退申上げましたの御願ひは、何卒、舊例として、この彌兵衛奴に牢屋敷の科人一人を下さりまするやう、偏に願ひ奉ります、滞りなく牢屋敷普請の大工には死罪の外の科人一人を賜はりまするとの事、これは御役人様方より公然に仰せ出さるゝ義ではなくとも、その大工が歎願に依ッて御聞届け遊ばさるゝといふ、その御舊例を唯一事の心願に存じまして、その日を働かねば其日を喰へぬ下種の大工風情が、みす〴〵身代の半分を抛出して首尾よく御用を勤めましたる義に御坐りまするゝなるほど、他の者どもより半分以下にて落札を取った仔細、始めて相分つた、ついでには科人一人を下さるゝ舊例、上より許すべき事

ではないが、其方の歎願に依つては随分、遣はすまいものでもない、じたい何者ぢや『恐れながら、梅と申しまして今年十五歳の女子一人、元來この彌兵衛が親戚でもなく由縁でも御坐りませぬが、その梅の父なるものに十八年以前、一時の恩を蒙りましたる拙者、何卒、今度の御褒美に代へて願ひあけまする』いや近來に凡例のない神妙な願ひぢや、取調べた上、差支なくば確に下さるぞ』はッ、ありがたく存じ奉ります、ついでながら申上げますが、その梅なるもの、幼少にて父母を失ひ、どこに頼る方もない苦しまぎれ、ある家に縁付き居りする一人の伯母を尋ねてまゐりしところ、その伯母が思ひの外の邪慳にて果は怨恨の餘り唯一筋に突詰めての無分別、小柄にて其伯母に少々浅傷を負はしましたる科に依り、去年の春より牢舎を仰付けられしとの事、かつ又その伯母も現在無事にて疵の痕も御坐りませぬ、根が年端もまゐらず前後も辨へぬ一時の出来心、さる深い仔細あつて大膽不敵の振舞でも御

坐りませぬば、何卒、格別の御詮議を以て『や、それほど科人ならば、さして事の面倒もあるまい、わけて今回の其方が働きに免じ、三日の中に取調べて遣はすぞ』恐れながら、くれぐれも願ひあけまする』さてく〜今時には珍らしい男ぢや、たとひ少々むづかしくとも、その心底に免じ、我等また何とか致して遣はさう』

其二

土一升に金一升、織るが如く摺違ふ往來の袖袂に其日々々の損徳千兩の火が出るといふ江戸の繁昌も、さすがに冬の夜は更行くまゝの霜も置くらむ人影淋しく、まして川一重を隔てし本所の場末は筑波おろしの肌寒く、犬の遠吠かすかに聞ゆる龜澤町の大地いよく凍りて辻の番屋の火の氣も薄き頃、兩國の河岸傳ひに二挺の駕を急がして歸り來りし大工の彌兵衛、自己まづ我家の門戸を叩きながら、はや心得て引開くる女房に何をか私語きつゝ、あとの一挺

毒婦

より手を取って引出せしは十五六の娘、棒先の小田原提灯に姿は朦朧なれど、眞白の顔ちらと見えて時ならぬ闇の夜の花一輪、どこから散つて来たかと駕人足に疑はれぬ、良人に連添ふ女房氣質、定めのお賃に酒料を添へて、俄に喜ぶ聲を閉切る戸外に聞流しつゝ、この夜深に近處合壁を憚りてや、旨もなく用意の小料理そつと奥の二階の一室に運び出せば、主人の彌兵衛おもはず振返りて片微の微笑を浮べながら、「おい噂ア、この嬢様だ、正午前お連れ申して来る事も出来たのだが、隣家近所の手前、わざと斯う夜が更けてからの事にしたのさ、何は措置き、去年の春から長の間御窮屈で、大分お疲勞が見える様子だ、ゆるく委細は改めての事、今夜ア兎も角、まづ御挨拶だけしておくが宜い、え、嬢様、此女が噂アで御坐います、なアに貴嬢、根は互ひの放蕩から屁を放合つた氣樂蜻蛉の夫婦で、心も軽けりやア身代も軽い貧乏世帯の差向ひですから、萬事御遠慮なく、いはゞ御自分の宅と思召

して、當分のうちは何よりも身の御養生が大切で御坐いますよ」といひつゝ引合されしは四十三四の世話女房、作らねど自然の垢脱くつきりと江戸生育に伊達めいて、いづれ昔は尋常の堅氣であるまじき風情、まして年來の家業柄、浮世慣れたるまゝの氣輕に小膝を進めて、「かねぐお噂は承りましたが、お目にかゝるは今がお初、ほゝゝゝなるほど、おやつれ遊ばしたやうでも玉は玉、凄いほどの御容貌で在らつしやる事ね、嗚まア長の間お淋しう御不自由で御坐いましたらう、その代り當分は思ふ存分お氣まゝを遊ばせ、何分かやうな職業柄で萬事不行届の事ばかり、お氣には召しますまいが、ねエ良人、互ひに隔意なく打解けてごへ下さりやア、どうか斯うか及ばずながら、お世話を、今日も貴嬢、お迎ひに行くと申しますから、五六日前に仕立て、置きました御著替を出したところが、畜生め何故こんな見苦しいものを拵へたと、さんぐ叱られました、ほゝゝゝしかし下から上まで新しい物で

さへありやア宜いと心得まして、たゞほんの一時の間に合せですもの、これからは何とか致
しますから、ねエ貴嬢、今日のところは御辛抱下さいませよ』え、餘計な事をいふな、しか
しお嬢様、お心だけは丈夫に持つて下さい、お世話といふほどの事は逆も出来ずまいが、
まづ及ぶだけの扶助、お力になる決心ですから』

神か佛か、うつゝか夢か、思ひもよらぬ助けの綱に曳出されて、現世からなる地獄の底より
浮び出でたる不思議の身、まして今こゝに其夫婦が現在我子の如く、父にも母にも増して一
方ならぬ厚き慈悲に、我を忘れて溢るゝ涙を袖に押拭ひながら、しづかに両手をついて言葉
さへ力なげに聲細く、何と申して宜いやら、心では胸に一ぱい、口では只今お禮の言ひやう
も、御存じの通り兩親はなし、これが全く生命の親と有難う存じます、なほ此上とも御見捨
なく、たとひ下女働きを致しましても、今日の御恩ばかりは』ことし十五といふ年には増し

て言葉の筋も深く、身は二年越の牢屋に疲れ果てながら氣は張切つて更に取亂せる體もなく、
やつれし顔貌は哀れに衰へたれど、雪を欺く富士額に黒漆の如き前髪が生際といひ、元來の
色白を長久の日蔭に包みし水際いよく立ちて物凄く、このまゝ一月か二月の養生せし曉に
は飾らねど自然に備はる男の生命取、いかなる美人になるやらむと、夫婦もろとも今更に見
惚れぬ、

むかし其父よりうけたる恩義ありとはいへ、今の我身代を傾けて救ひ出せし彌兵衛の眞心、
妻も良人の氣に連れて日夜に劬はり慰めつゝ、夫婦ともく我子の如く介抱せしかば、元來
の身に疾病なく加之も萌え出づる若草の芳紀、宛がら春に逢うて蒼の花の咲くに等しく、や
つれ果てたる身の瘦も次第々々に顔の色さへ自然の艶を含んで、はや一月あまりの後は春

風二十四番の千紫萬紅に秀でたる天生の美人、その名の梅といふ色も香も四邊に薫じて、名筆の畫より脱け出でたるかと疑ふばかりになりぬ、
 一夜、主人の彌兵衛と一人、かのお梅が居室と定めたる奥の二階の上り行きて、持運びし茶菓を進めつゝ、聲を潜めて語り出しぬ、「いや毎日々々朝夕に見馴れて居りますから、さう目に立って驚きも致しません、一月以前とは丸で別人のやうにおなりなさいました、この分ちやア、もはや大丈夫、さして御氣分の悪い事も御坐いますまい、時に嬢様、今夜ア少々この老爺が改まって御相談を致したい事で伺ひますが、どうか萬事お心まかせに一切わけ隔意なく打明けて承りたう御坐います、それに就き先達は、まだ闇から出たばかりで元來のお身體でもなし、わざと差控へて委しい事も申上げず、たゞ十八年以前、貴嬢の父御様に恩義をうけた御報恩とのみ、お話し致しましたが、今夜は改めて委細を申上げますから、第一は

御自分のため、よくお聞き遊ばせよ、貴嬢の父御様といふのは元來この本所の割下水で横山新兵衛と音に聞えた御家人中の腕利、あまり其腕が妙なところまで利き過ぎて異な風聞も立ち、喧嘩の出入、刃物三昧の後始末、遣る遣らぬの引受所、鬼でも引擱んで人の怖がる事といへば地獄の釜の一足飛も糸瓜の皮の勢ひで、果は江戸市中に二つ名前の肩書ある奴を子分のやうに引付けての大賭博、それが役向お頭の耳にも這入った曉の破れかぶれに御家人の株も賣飛してからは、なほさら以ての身持放埒に御親類の交際も絶え果て、お可哀さうに御新造は苦勞の年月かさねて貴嬢を生んだまゝ、産後の二月目に御葬式、その前後この彌兵衛も人に嫌がられるを鼻頭の自慢で押通した男、親譲りの次工業業は十三年前に死んだ兄のお心よしに委して置いて、類は友よぶ自然の世諺、お父様とは格別の懇意で、随分いふに言はれぬ凄惨事も致しましたものさ、中にも十八年以前、拙者が三十五の脊、少しの意氣地から深川の源太

とて其ころ名を得た八町堀の手先を闇打に討殺して、殿しい詮議に身の置所も無かつた時お父様が男づくに引受けての後盾、およそ二月ばかりは其まゝ隠れて居りましたが、何をいふにも相手が相手の役柄で、平生から世間に悪い風聞の立つた弱身の此方で、いよく露見、もはや叫はぬ瀬戸際、しかし生命あつての物種、遁れるだけは遁れて見ようと、忘れもしない霜月の二十六日、寒空の闇に紛れて拙者は東海道筋、お父様は奥州街道と、互ひに忙しい中の男泣で分れましたが、一足前に出た此彌兵衛は上方で三年無事に暮した後、そつと江戸に立歸つて様子を聞けば、まことに何とも以て申譯のない事、つい一足おくれたお父様は不意の捕方に圍まれなすつたとの事、然し落ちても枯れても流石はお侍、繩目の恥を斬抜けて二階へ駆け上るや否、梯子を引いて其まゝ見事の御切腹を遊ばしたとの風聞、なるほど聞けば年貢の納め時、外にも何か遁れない仔細があつたとはいふものゝ、眼前の原因は此彌兵衛がた

めの御最後と、人には言はれず心の念佛唱名、俄に發心して魂魄を入替へた回向の第一に、せめて忘形見の嬢様を育て、御報恩の一事と存じましたが、何分うまれて二月か三月目に見ず知らずの約束で人手へ遣はされた御行方の知れよう筈はなし、十五年以來の朝夕、只こればかりが氣にかゝつて夢にも忘れず暮しました彌兵衛が、一念の届いたと申しませうか、ふとした事から去年の春、その御子様は貴嬢で、かうくゝいふ理由あつて御入牢と聞いた時の驚愕「おもはず兩眼を瞬いて顔を反けながら膝を進むれば、ありし昔の父が事を眼前に見る心地して、お梅は猶更ら悲しく聲を忍んで泣き伏す體に、彌兵衛いよく堪らず其背を撫でつつ、「しかし嬢様、何事も過ぎ去つた昔の夢で、自分の身勝手をいふやうですが、どうか今度の一件を御恩報じの萬分一とも思召して、萬事さらりと御免下さいまし、その代り此彌兵衛が目の玉の黒いうちは、あくまで引受けて力の及ぶかぎり御世話を致しませうから、つき

ましては貴嬢も來年は十六、十五といふのも僅か押詰つた今年の冬一月で、もはや女一人前の年齢におなりなさるんですから、もし此後の身の振方で、何とか御料簡でも御坐いますなら承りませう』その、その横山新兵衛といふ名前だけは、うすく聞いて居りましたが、お父様の事は妾の夢にも知らない時の昔で、たゞ今度かうして、思ひもよらず世の中へ出られるやうになつたのを、神様が佛様かと嬉しう思つて居るばかり、どうか此上とも『それぢやア申しますが、お氣に觸つたら御免下さいませよ、つまるところ、大體の天生が、その御容色ですから、萬事が女で埒のあく當世、丸裸で出て喰つて著るには御不自由もありますまいが、さて御両親はなし、たゞ一人の伯母御は去年の春の事で二度と再びお逢ひなさらう筈はなし、こゝが生涯の考へ時で御坐いますよ、よく存じて居りますが貴嬢を産んだ、おッ母様は其ころ本所きつての評判に唄はれた御容色で、しかも氣立の優しい柔和の方でしたが、何

分お父様が今いふ通りの身持で、喰ふものが無けりやア天狗の三盃酸でも酒の下物にせうといふ御氣性、ところで先月以來、それとなしに氣をつけて伺ひますに、なるほど其間に出來た貴嬢で、御容色は母御にも百倍まして凄いほどの御天生だが、どうやら御氣性は、お父様に似ては在らツしやるまいかと思ふ事が御坐いますよ、いくら混み入つた事情があるにしろ、女が十四の小腕で、現在の伯母御を斬るといふなア随分、おそろしい御料簡、しかし今更この彌兵衛が彼是いふ場合でもなし、たゞ此後の行末を、おとなしう、優しう、何處までも女は女らしうね、第一その御容色と其お伶俐さで、危ツ氣のない無事の世の中を柔和一方でお通しなすつたら、どんな幸福な御身分になるかも知れませんぜ、こゝを貴嬢よく胸に疊んで、なるほど本所の割下水に聞えた悪黨新兵衛が忘れ形見かと人に指をさゝれないやう願ひます、ね嬢様、わかりましたか、二十年の昔を洗へば互に細くない事ばかり、其お父様と一つ

穴の男が今かう佛のやうになつて申上けるんですから、世間普通なみくの奴が義理一片の諫言と思召しちやア生涯の間違ですよ、實は拙者も此年輩まで子はなし、親類から貰つて養子にするといふ的もなし、いは廻り合した不思議の御縁だ、お武家の種を大工風情の家へは異なもんですが、水の流れと人の行末、現在かうなつた曉ですもの、もし貴嬢さへ御不足なくば此まゝ娘分にして、ともく御兩親の御菩提も懇ろに弔ひたい心底、それともまた、たとひ何が何でも生れた種は種、お父様の悪名を血筋の武家で雪ぐといふ思召なら、この彌兵衛また別に思慮が御坐います、せめて一二年の間、力の及ぶかぎり女の諸藝一通りを仕込んだ上、お大名へ奥勤めの御奉公させましてもよし、どちらなりとも貴嬢のお心次第いひつゝ膝すりよせて差覗けば、まだ乾ぬ涙の際より聲曇らしながら、「只今も申しました通り、昔は昔、この御夫婦を生命の親と存じて居りますから」なるほど、それでは改めて、この

彌兵衛が娘分になつて下さいますか』さうしていたゞけば、御恩の上の御恩で、なほさら有難う存じます、家の事や父どもの事實は皆、妾が東西も知らぬうちのこと』いや、よく分りました、その御料簡を聞いた上は、明日から嬢様とも申しませんよ、よろしいか、お梅、お梅と呼びますから、其方でも眞實の親と思つて、互に腹の底から隔意のないやう、偶には氣儘が募つて喧嘩するくらゐにね』かやうな不束女で御坐いますから、さぞ、嘸お氣に召さない事も御坐いませうが、足らぬところは、朝夕お叱り下さいまして』「はゝゝゝ足らぬ段か、實は親に過ぎた娘さ、しかし世の中の縁といふもなア不思議なものだ、御兩親も草葉の蔭から、まさか此彌兵衛をお怨みもなさいますまいよ、はゝゝゝまづ目出たい、めでたいく〜」

其三

毒婦

本所の七不思議が八不思議となつた、その一不思議は龜澤町に物いふ蒼の花、天から降つたか
 地から湧いたか、あの大工の彌兵衛奴どこから擱んで來居つたやら、かぐや姫を探し當てた竹
 取の翁でなうて、これは小町娘を掘出した無價取の阿爺ぢやとて、俄に世間の風聞に上りつ
 ぶ、近處の若者どもは氣も心も空に目色を變へての大騒動、年頃の息子を持つ親は猶更ら朝
 夕出入の用心堅固にして、町内の中央に陥牢でもあるか家尻切でも住んで居るかのやうに恐
 怖を抱きぬ、

それも其筈の天生お梅、はや十五六の花の魁かけて色も香も深く、おのづから備はる男殺し
 の本性とて、かりそめの言葉の端にも情らしく、無心の起居にも飽くまで床しけの艶を含ん
 で、持ッ生れし自然の愛敬こほる、中に凛とせし額際、つくらぬ眉毛をりく、擧めて物おも
 ふが如く、いきくと張切つたる黒目勝の目千兩、撫で下せし地藏肩、すらりとせし柳腰、何

とやら取急いで歩む時の風情、唐人の寢言に蓮歩と吐せし足の運びを、化粧するかの富士の
 裾野に残んの雪か、戀に忍ばむ宵闇の卯の花かといひし横町の洒落隠居まで、杖を力に振返
 ツての目鏡越、なるほど七十年來かゝる美人は夢にも見た事なしとぞ叫びぬ、

さらぬも彌兵衛夫婦は俄に珠玉を抱ける心地して、金は取られても稼げば戻る、家は焼けて
 も建直す職業柄、うみの子よりも秘藏の娘、これを盗まれては南無三寶の曉ぢや、とかく人
 の心の浮き立つ春先は用心せい、わけて生暖かい南風の吹く日は猶更ら大切、得て悪い蟲の
 附きたがるものぢやとて、朝夕に心を用ひ氣を配りつ、顔色が勝れぬと見れば老爺まづ尻
 ひツからけて醫者へ駈込み、夕暮の錢湯に行く時は母親が附添うて四邊を拂ふ自慢顔、さて
 も風聞に上つて半歳たつた、ぬ間に拵へ取の嫁いや持參金の入婿にと相談うけしこと前後
 二十七軒、江戸の場末の龜澤町に四季不斷の花といはれて、わざく用もないに迂路する男

の数も日に幾人、果は言ひ囃し聞き傳へて一つの名物とぞなりぬ、

一筋に思ひつめたる女の魂、翻れば忽ち色香に包む花の針、まして怖ろしや人は一念の性を引く血筋の世諺、十四の小腕に怨恨を含んで現在の伯母を殺さむとせし不敵さも、なるほど割下水の悪黨新兵衛と唄はれし父の子といへば其苦ながら、しらぬ世間の目よりは描ける如きお梅の風情、天井に荒るゝ鼠の音を聞いて驚き障子の棧に這ひ渡る蟲を見て飛び退くかと思はるゝ優しさに、得もいはれぬ愛敬を添へて加之も天生の才氣利發に朝夕の立働、彌兵衛夫婦を眞實の親として我身を忘れたる振舞に、今は孝行娘の名さへ高くなりつゝ、やれ勿體ない此寒中に玉の腕で井戸端の水汲むところを見たぞ、いや今朝は母親との喧嘩、さても不思議と思へば厨下の掃除を妾にさして欲しいとの争ひぢや、あの皺くちやの梅干阿爺が薄穢い

向脛に疵をした時は涙ぐんで膏藥の張替に膿血も吸ふばかりの介抱さ、せめて其優しさの百分一も我等に向けてくれゝば生命も入らぬもの、まして十六といへば石でも木でも男ほしやの萌え立つ芳紀を、あたら名物あのみまゝの貧乏世帯に燻べるかと思へば、戀も情も通り過ぎて腹が立つ、浮世が嫌ぢや、生きて居る甲斐なし、人間を止めて坊主になりたいと、しきりに氣を揉んで立騒けども本尊さらに浮きたる色を見返りもせず、朝夕たゞ甲斐々々しき襟かけに母の手を助けつゝ、をりくは店頭の木屑鉋屑に塗れて父の彌兵衛に吐らるゝほどの立働、浅草の觀音様に尻を放りかくる奴はありとも、あの娘に向うて眞正面より唾を吐くほどの男はあるまじとぞ囃されぬ、

兩國の橋の上に喧嘩口論の無い日はありとも、此ごろの龜澤町に明けても暮れても名物お梅

の風聞を立てぬ日はなく、父の命日を忘れて母親の涙を甘茶と思ふ放蕩息子も、お梅が門口の出入を時も違へず覚えて自慢談話の種子とし、生命を繋ぐ大事の節期に商賣の掛金を取外す間拔野郎も、お梅が夕暮の錢湯歸途を辻に待受けて一度も見外さぬといふ片思ひの心中男が七八人、いづこも同じ嘘八百の當にもならぬ千兩千三の吐し場所その町内の髪結床に集りて、互に我を忘るゝ魂魄抜殻の五體を持ち寄りつゝ、何は儲置き只これ沙汰に浮かれて餘念もなし、

『おい／＼どうしたもんだ、今更ら色男の詮議立するでもねへが この鹽ッ辛い世の中を懷手で喰ッて通る金箔付の獨身者が、およそ町内に三十人たらずも蠢めいて居ながらよ、あの本尊いつまであのまゝで門前の禮拜ばかりして居るのだ、せめて一人か半分、面恥を掻く覺悟で小當りに當ッて見る奴がありさうなもんだね、うか／＼すると外の町内の化物に喰ッ

て仕舞はれるぞ』さういふ貴公から、まづ宇治川の先陣してみるが宜い、途中で溺れて仕舞やアそれまでさ、小當りの面恥のと、そんな手ぬるい料簡ぢやア無効だ、一番こゝは大當りの生命がけて渡ッて見るんだね』はゝゝゝ心底の善くねへ奴等だ、人に瀬踏をさして置いてのこゝゝ其後から渡らうといふ料簡だな、しかし色事と戦鬪は義理人情の入らねエこッた、友達の死骸を踏越えて敵に組付く坂東武者もあつたとさ』はゝゝゝ敵手なしの獨り相撲、かけで阪東武者の武者振ひばかりするよりやア、誰でも宜い、一時も早く武者振り付いて埒をあける、あのまゝ宙に浮かして置かれちやア氣が揉めて堪らねエ、同じ腹が立ッても癩に觸ッても、いよ／＼誰の功名手柄と極ツた曉は却て天下泰平だ、せめて夜など無事に寝られるからね、しかし斯う見渡したところ、おそらく我こそと一番槍を付けるほどの武者が居ねエ、どれも／＼途中で犬死しさうな御面相だ』べらぼう奴、春畫紙の殿様ぢやアあるめエし、

毒 婦

面つらで出来るできなら人形にんぎょうの戀こひだ、男おとこは赤裸はだか百貫くわん、舌した三寸さんすんの世辭せじ愛敬あいけいと胸むね八寸はつすんの心意氣こゝろいきといふ事ことを知らねエか唐變木たうへんぼくめ、ところが丸裸まるはだか一匁もんめ五分ごぶんで舌した足たらずの無愛敬むあいけいで心意氣こゝろいきが夏の牡丹餅なつぼたんもち、ぶんと御坐ござッて居ゐちやア鼻持はなもちがならねエゼ、鼻持はなもちがならなくッて尻餅しりもちでも搗つかうか、いや尻餅しりもちより焼餅やきもちが宜よからう、その焼餅やきもちで思おもひ出だすでもねエが、取とッちめるなら今のうちいまに占しめて仕舞しまふが宜いい、いや拵こしらへ取とッて嫁よめにくれるの、いや持參金ちさんきんで婿むこにならうのといふ申込まうしこみが半歳はんざいの間あひだに三四十人さんじゅうにんもあつたとさ、本尊ほんぞんは兎も角うさぎもかく、かうなると親おやの料簡りょうけんが危あやくッて油斷あぶらだんならねエ、第一だいいちあの通りとおりの孝行かうかうもんだらう、もし親おやが承知しょうちで、うんとさへ言いやア忽たちまち往生わうじやうじやう寂滅じやくめつ、どんな南瓜野郎ななぢややらうの自由じゆうになるかも知しれねエ、いは、此このところ男前おとこまへより金次第かんだいだ、しかし全體ぜんたいあの老爺おやぢどうする考かんがへだらう、今いまぢやア家業かげふの大功だいくを止とめても其日そのひから左團扇ひだりうちばで安樂あんらくに暮くせる身みで居ゐながら、降ふッて來くる金銀きんぎんの雨あめを片かたッ端はしから跳はなッけて平氣へいきの體ていが不思議ふしぎだ、もし人の知しらね

エところに天生うまはつの不足ふそくでもあッて、錦繡にしきの裏うらの手織ており縞しま、みかけ仆たふしの不具かたはちやアあるめエか、なるほど、こいつア全く點てんの打うちちどころだ、出盛でさかりの蚊がのやうに只ただわい、軒下のきしたで騒さわぐ中に、そこへ氣きが附ついたア流石りうせきに昇あげたもんだ、いや、いづれも方々かた々と四角しかくばッて乗出のりだすにも當あたらねエが、不具かたはか不具かたはでないかの前に、まだ一證議いっせんぎがあるぜ、全體ぜんたいあの娘むすめを何者なにものだと思おもふ、彌兵衛夫婦やへべゑふうふに子のねエ事は今更いまさらに初はじマッた譯わけちやアなし、どうせ、どツかで貰もらッて來きたんだらうが、もしこの江戸えどの親類しんるいなら、いくら何でも盆ぼんと正月しやうげつぐらゐにやア互たがひに往來やうらいもするから、今いままで近處隣家きんじよごなりで見知みしらない筈はずがなしさ、また遠とほい田舎いなかの身みのものといひたいが、偕ああの娘むすめどこに土氣つちけがある、いかな見倒みたふし屋やの古金買ふるかねかひにかけても田舎育いなかちたアいふめエ、しかも七歳ななつか八歳やちの小女郎こめなら、また南風みなかぜの飴細工あめさいくで南瓜かぼちやが胡瓜きゅうりに化はけないとも限かぎらねエが、まるで降ふッたか湧わいたか突然とつぜんに出でた本尊佛ほんぞんぶつ、そいつが中肉中背ちゆうにくちゆうせいすらりと揃そろッて三十二相さんじふにさうを通とおり越こし

た十六の娘たア神武以來の珍事だ、しかし迷子になる年ぢやアなし、誘拐された様子もなし、ほかりと不意に現はれて其日から親子の間か世間の手本にあるほどの睦まじさ、どう考へても分らねエ、いくら腕を組んで探つて見ても腑に落ちねエ事ばかりだ、なるほど、さう聞きやアいよく怪しい、よし不具でなくともさ、素性の知れねエ女は暗闇で御馳走を喰ふやうなもんだ、かうなると結句あの生辨天だけに猶更ら却て薄氣味が悪い、さうだ、草叢に埋れても珠玉は珠玉で、あれほどの娘だもの、もし片田舎なら別しての事、江戸市中どこの隅に隠れて居たつて人目に附かねエ道理なしだ、してみると、おい、おい、高い聲ぢやアいはれねエが、もし人間外の産物でなからうかね、人間外の産物たア何だ、穢多よ、穢多の事さ、穢多にやア却て驚くほどの美人があるもんだぜ、とかく世の中は自由ならずで、お大名の化姫様に大家の獅子ッ鼻嬢さんといふ事があるからさ、こいつア際どいところを突いたも

んだ、なるほど穢多かも知れねエ、さうでなくつて全體あんな娘が不意に掘り出せるもんかね、いや穢多でも非人でも宜いから、せめて一度のお情にあづかりたい、どうせ此ま無事に居たつて眞人間の名譽物にやア覺束ないからねエ、は、は、は、

穢多だ、穢多に違へねエの中央で今更ら呆れの宙返りだと、我を忘れて思はず喚き合ふ折しも、店頭の油障子がらりと引開けて現はれ出でしは今いふ噂の本尊お梅、片手に反故もて包める剃刀を持ちながら、『どうか、これをね、いつでも宜しう御坐いますから、お手隙の時に磨いで置いて下さいまし、そのうち、いたゞきに上りますから』いひつゝ剃刀を渡して溢るゝ愛敬に會釋しながら、そのまゝ立出づるかと思へば、そよと吹く春風に花の回るが如く、音もなう靜に振り返りて、今まで喚き立てたる七人の男が面體いち／＼と見詰めたる顔色、雪より白き面に何とやら薄紅を帯びて張切つたる目元に柳眉おのづから動きぬ、『どちら

の方々は存じませぬが、只今、穢多だくと仰しやツたのは、誰の事で御坐います、また御深切に餘計な御心配まで下さいますして、不具だの不具でないのと、いろくのお言葉、もし妾の事で御坐いますなら、どうか、お捨置き下さいませやう。いちくお名前は何ひません、いづれ親どもと相談いたしました上、あらためて、お禮に参りますから。まだ世に慣れぬ娘心の口惜涙で泣き出すか、さては恥かしさに顔うち赤めて遁け出すかと思ひの外、天生もの凄きまで水際だつたる目色を据ゑて、じろくくと見詰められたる七人の男、宛から頭上より寒中の氷を浴びし心地して總身ぞつと寒く、いづれも俄に顔色を失ひつゝ一縮みに縮み上りぬ、

年齢にも容色にも似合はぬ怖ろしさに、鬼とも組むべき血氣の大男七人が言句もなく恐れ入つたる體を、じろりと秋波に見遣りて小氣味よしと思ひけむ、笑渦の露を残して立出でし

梅の後姿に、いよく驚き呆れて互に顔を見合せながら、首を縮め聲を潜めて目ばかり光らせつゝ、「おい、どうだ今の權幕は、あれが今年やうく十六の處女で御坐い」なるほど、いよく尋常女ぢやアねエ、しかし堪らなかつたぜ、いちくお名前は存じませんが、いづれ親どもと相談の上あらためて御禮に参ります、と喰付いてやりたいほど愛敬のある顔で、しかも二重險の張切つた黒目勝で睨んだ時の凛々しさ美しさ、凄かつたね、ぶるくと思はず胸震ひがして未だに止まねエぜは、ムムムム随分と宜い馬鹿だ、いくら何だつて十六の小女郎に眞向から一本まるられて嬉しがる奴があるものか、それほど喰付きたか何故あの時に飛付かねエんだ、意氣地のねエ、さういふ貴公が何故また黙つて居たんだい、豆鐵砲を喰つた鳩のやうに目ばかりバチくさしてよ、そこが平生の友達甲斐だ、七人もある中で乃公ばかり出て言葉を交しちやア、あとの嫉妬が面倒だ、實ア皆に遠慮して居たのさ、あ

風の心地と思ひの外の大熱を病うて、心ばかりは生れついでに岩疊ながら叶はぬ老の骨節まづ弱りつゝ、昔おもへば男山きて見よかしと誇りし餘波の文身まで色もなく褪め果てゝ重き枕に就きぬ、

多年連れ添ふ女房は猶更、わけて娘のお梅は地獄の底より救ひ出されし生命の父なり身を養はるゝ恩義の父なりと、日夜の介抱さらに我身を忘れつゝ、神に祈り佛に念じ目も泣き膨して狂ふばかりに歎きしが、あはれ脆きは人の身と草の葉の露雫、十日あまりの後には夢うつゝの如く舌さへ吊上りて、さぞや言ひ遺したき心の數々も口には得言はず、曉方の鐘の音もろとも竟に空しくなりぬ、

たゞさへ底を拂ひし内證に、其日々々を送る主人の醫藥に追はれつゝ、しかも俄の病死に取残されし母子は身も世もあらぬ心地、やう／＼物賣り拂うて涙の隙より野邊の葬送をせし

が、偕この行末を何とせむ、母一人、娘一人、渡る浮世の浪風に力と頼む櫓も楫も失うて、小夜の千島の音に泣く思ひ、どこに取付く島もなし、

暮行く春の青葉まじりに、ちらほらと残んの花はありながら、還らぬ人の後には母子たゞ二人の涙の外に物もなく、手向の水の初七日も濟むか濟まぬうち、はや其日の朝夕に細き炊煙も立てかねつゝ、やう／＼四十九日の香華さへ心にまかせぬ夕まぐれ、奥には燈火の影うすく幽かに聞ゆる母が念佛の聲、しみ／＼と何とやら身に染む浮世の悲しさに、お梅はそのまゝ目を閉ちて打沈みぬ、

をりしも門口の戸そつと引開けながら、中腰になつて家内を窺ふものあり、はや戸外は暮れて奥の燈火うすく届かねば、お梅おもはず振り返りて眉を顰めつゝ、「どなた様です、何の御

毒 婦

三六

用で『母親は在宿かね、横町の伊勢屋からだか、實は母親よりお梅さん、ちよいと此處まで来て貰ひたいね』

横町の伊勢屋といへば本所で一二を争ふ大質屋、かの彌兵衛が牢屋敷の普請を引受けし時、わが貯蓄の用意だけでは足らぬ損金の百兩を借りしもの、しかし現在この住家を抵當の證文に書入れしかば、この本人の死後は猶更ら厳しい催促、初七日を過ぎた曉は引渡せ出て行くと朝夕に急立てしが、その實は伊勢屋の隠居ことし六十の阪を越えながら、魚心あれば水心の水性に浮かれてお梅を的の追手搦手、白いか黒いか此奴も尋常の鼠でない店の番頭を使者として、きのふも今日も今宵また、それかと思へば身を切らるゝよりも辛けれど、差迫る今の難儀も原因は我ゆゑ、まして母が涙の回向を妨げじと、お梅そのまゝ走せ出でて會釋しながら、『何で御坐いますか存じませんが、母は今あの通り奥の室で、もし妾に分ります事なら』

薄闇に色は見えねど滾るゝ愛敬の香は自然に匂ふ心地して、番頭おもはず四邊を見廻しながら、『母親に知れないのが却て幸ひだ、全體この母親も元來は、まんざらの素人でもない癖に固いばかりで物の道理が分らないよ、過日から度々いふ通り、何も今この家を急に明け渡せ出て行けのと居催促するぢやアなし、早い談話がお梅さん、たゞ一言の挨拶で済むんだもの、なるほど今年やうく十八になつたばかりの娘盛りで、しかも其容貌でさ、六十の阪を上りつめた隠居さん、氣に入る筈はなからうが、さて世の中は自由ならぬものでね、仕方がない、死んだ親父が残した證文を著て寝ると思やア宜いのさ、ね、悪い事は言はないから胸に手を當てゝ能く考へるが宜い、長いものには巻かれる道理で、立寄らば大木の下だ、うんとさへ言やア此家このまゝ無事に貰つた上、母子二人が安樂に暮せるぢやアないか『いえもう、御深切様は、有難う御坐いますが、何分、妾の料簡では、いづれ母とも相談いたしました』

「いやその相談が宜けない、相談して居ちやアいつまでも埒のあく筈がないから、幸ひ斯うして本人に當るさ、母親だつて世間の手前や何かの義理で、口でこそ承知は出来まいが、つまり喰はず著すには居られまいし、貧に迫つて苦海に沈むもンさへあるぢやアないか、肝心の本人さへ得心した上は、まさか叱りもすまいよ、ね、こゝは早いが勝だ、折角の搖錢樹を取外すと共に家を追立てられて雨露に打たれるよりやア、どうだね、暫時いやな夢を見る氣になつちやア『いろくの御深切を、きけば聞くほど、中間に立つた妾が『中間に立つた身が辛いといふからは、お梅さん、半分ぐらゐは承知だね』外に、思案が御坐いませぬもの』

『よし、本人が其處まで分つて居りやア、もう大丈夫だ、明日の朝あらためて母親を説き付けるから、わざと今夜ア此まゝ黙つて居るが宜いぜ、しかし感心だ、よく得心してくれたよ、これが全くの親孝行だ、最初には泣くほど嫌な事でも、また後日には笑ふやうなもんでね、

はムムム」

をりしも奥の回向や濟みけむ、お梅くと呼ぶ母が聲に、伊勢屋の番頭そのまゝ軒傳ひに立去る影を、うらめしう宵闇の星明りに見送りつゝ家内に入れば、母親おもはず眉を擧めて行燈の火口を差向けながら、『お梅や、今ね和女、誰かと門口で立談話をして居たやうだね』おツ母さん、實は、あの伊勢屋の番頭さんが、また『あゝ嫌だく、うるさい事だねエ』しかし、あの通り毎日々々責め立てるんですから、今のうち何とかしないと、いつまで此まゝには居られませんもの』だつて和女、外に仕様がなないぢやアないかね』仕様がなないといへば、それまでですが、おツ母さん、どうか妾に二日三日お暇を下さいませんか』二日三日の暇を呉れつて和女、どうする心算だへ』別に、どうといふ思慮も御坐いませんが、其間おツ母さんさへ知らない顔をして居て下さりやア、きつと妾が此家の證文を取返して御佛壇へ供へるか、

毒婦

四三

また外に母子が身の立つ工夫をするか、何とでも一生懸命に、必ず御心配はかけませんから、後で叱られるやうな事は致しませんから、只おッ母さんさへ目を閉ぢて、假令どんな事があつても驚かないで、黙つて知らない顔さへしていただければ宜いんですもの、もう妾も今年は十八、いくら馬鹿でも小供では御坐いませんし、まさか六十を越した隠居さんの戯弄物になつたり、質屋風情の番頭して居るやうな人の術に乗つて泣きも致しません決心、しかし妾の姿が見えなくなると同所に、あの隠居と番頭さんの處へ往つて、あれまで御深切に仰しやつて下すつた娘めが急に居なくなりましたと、かういふ工合に念を押して置いていたゞきたいの、さうすれば二日か三日の間に、きつと證文を取返しますから、少しは悪いやうですが、かう差迫つた毎日の難儀で背に腹は替へられませんもの、時と場合の成行で』
さすがに兩眼の涙は含みながら、描ける如き花の面に何をか思ひきつたる決心を帯びて、

じつと燈火を見詰めたる體、三年越の朝夕を我子として見馴れたれど、うまれし種は種なり、十四の春の事さへ思ひ出せば今更に物凄き心地して、母は俄に驚きたる體、『お梅、和女苦しさに餘つて何か、妙な事でも考へたのぢやアないかね、いくら辛いからつて、をかした事をしておくれでないよ、折角かうして今まで無事に來たのだから、たとひ明日が日に此家を追出されようとも、また其時は其時の事だよ』ほゝゝさうまで御心配なさる事ではないんですが、いッそ打明けて見ませうか、しかし、もう門口を閉して仕舞つて、ねエ、おッ母さん』あゝ、それでは兎も角も門口を閉して、その、その理由を『ゆるく寝てから委しうねエ』

其五

兩國の夕暮、岸に臨める家々の火影ちらほらと流るゝ水に碎けて、中を漕ぎ行く舟の櫓拍子、

どこに浮世を忍び駒の三味の音、誰に聞けとや橋の袂を歩みながら、唄ふ小唄の一節、いつれも夜の景色を添ふる江戸の花これかと思ふころ、柳橋の船宿に聞えたる伊豆屋の二階よりそろりと障子を引開けて立出でつゝ、漏るゝ燈火に雪を欺く半面を照されて何とやら物おもはし氣の風情は彼お梅、ところから名物に集めたる紅粉幾人ありとも更に及ぶ色なし、お梅が立出でし階下の座敷には、伊勢屋の隠居ことし六十の霜枯阪を見返りながら花に狂ひし春の心、てかくと頭ばかりは光る源氏の君にも劣らぬ體にて、磨けどもくゝ寄る年浪の黒き皺面に入齒の白さ一しほ際だちつゝ、我を忘れて持てる盃もろとも流るゝ老の目尻を下けて、おもはず膝を進むる前には番頭太七、こいつも四十の分別盛りを闇雲の無分別に調子づいたる面相、主従互に四邊を憚り聲を潜めて笑を傾けつゝ物語りぬ、

「御隠居さん、どうで御坐います太七の腕は、十餘年來お店の結界を城廓として算盤と帳面

で討死しさうな筈ですが、お使ひ道に依つては此上また天下取の御相談にもなります覺悟、へムムムあれほど理由の分らない油断のならない物固い母親の目の玉を抜いて、まだ一切さらに世間しらすの本尊を此家まで連出して來た手際、少々お懇めの言葉をいたゞいても、まさか罰は當るまいかと考へます、第一あの母親が狂氣のやうに驚いて、娘が急に見えなくなりましたと半泣に泣込んで今朝の證據が即ち太七の働きましたところ、しかし御安心遊ばせ、人聞きの悪い誘拐では御坐いません、ことし十八になる本人が承知で私と計策を示し合せ、一時まづ野暮な母親を出し抜いたので、しれた曉は後のお祭禮、否が應でも、はムムム萬事それなりけりになるといふ趣向で御坐います『まさか斯う容易く出來まいと思ツたが、なるほど太七だ、全く感心したよ、しかし、本人が、よく承知したね、一人の母親を出し抜いてまで』そこが手腕で御坐います、龜澤町で評判の小町娘、この廣い江戸中にも無からうといふ

玉ですもの、實のところ、最初のうちは母親よりも本人が固くなつて始末に困りましたが、さしせまる貧苦の追手から責込で親のため孝行の擲手から涙の出るやうな深切ごかしで、いよく組伏せたのですから、なかく一度や二度の駈引ちやア御坐いませシ』さうだらう、こいつは店や家内の用と違つて、また別の忠義だから別に骨折代を出さうよ、はムムムム時に太七、なるほど今夜あらためて、しみぐと見ると、見れば見るほど全く蠶にも描けないね、おくれた事をいふやうだが、手を付けるなア勿體ないほどだよ、よく今まで他人の手にかゝらないで無事に通つて来たよ、まるで不思議なくらゐるだ、はムムムム』これを思ふと世の中は金で御坐いますな、それも金看板かけて色を賣る女なら知らぬこと、清淨無垢の苔の花、あんな美しい處女が貴老、御身代の爪の端で自由になるんですもの、ところで御隠居さん、前以て申上げて置きますが、外でも御坐いませシ、親父が死んで四十九日やうく濟ンだば

かりの身で、たよりに思ふ一人の母親を出し抜いてまで斯ういふ始末ですから、あとで母親に叱られた時の申譯がなくツちやア困る、それには幸ひ彼家の書入證文を呉れといふんですが、なるほど、本人の身に取ツちやア辛い理由で、また道理の願ひ、こゝは一番、こつちからも腹を見せてやらざアなりません、第一が後で面倒の起つた時、母親に文句をいはせない防禦にもなりますから』おツと皆までいふにやア及ばない、年は取ツても乃公だよ、その位の事は百も承知で、現に今夜ア其證文を持つて來てるさ』此奴ア一本まるりましたな、流石は御隠居さん、これだけの御謀反なさるだけあつて萬事なく、お若く捌けたところ、どうも恐れ入りましたね、はムムムム』はムムムムちやア今こゝで、おまへに渡して置かう、かけ込の料理屋で物を喰ツたやうに、まさか後勘定といふのも水臭いから』同じ事なら、さう遊ばした方が綺麗で御坐いませう、あの通り火の明るいとこちやア恥かしがツて居堪ら

ないくらるですから、私が取次いで、ちよいと別室で猶よく言ひ聞かして、この末長く、お世話になるやう申します。さうだ、おい／＼夜も更けるから早く渡してやるが宜い、どこに居るのだ。何だか上氣せて困るといひますから、川風にでも吹かれたら宜からうと申して、この二階座敷へ待たして御坐います。は、は、は、酒も飲まず、まだ夏といふでもないに、上氣せて川風に吹かれるところが千兩だ、いや、そこが生命だよ、は、は、は、」

今は夢うつゝの隠居おもはず盃を膝に落しながら、懐中より鼻紙入を取出して家屋書入の百兩證文一枚、外に一兩小判五枚これは當座の結納金、いや婿引出かと笑ひながら渡せば、太七そのまゝ請取つて座を起ちつゝ、媒酌人は宵のうちと戯れて二階へ駆け上れば、お梅なほ障子の外に立ちて柱に身を倚せたる風情、あの梅干阿爺奴が今夜これを賞翫するかと、わが主ながらも腹が立って思はず總身を躍らしつゝ、そこらに二三遍くる／＼と舞ひ歩きぬ、

「お梅さん、お梅さん、どうだね氣分は、少しは善くなつたかね、あまり夜の川風に吹かれ過ぎると却て悪いよ、さアその障子を閉めて此方へ這入りなさい、また別に喜ばせる事があるからさ。はい、有難う御坐います、おかけさまで、少しは宜いやうな心持も致しますが、まだ何だか、それに今更、こんな事を申しては濟みませんが、さぞ母が心配して居りませうと、氣になつて、氣になつて。『そりやア無理もないが、もう夜が更けてるから、明日の朝歸つても同じことだよ、第一、和女が頻りに頼んで居た家屋の證文これ見なさい、この通り先取に貰つて来たからさ。』まアいろ／＼と、貴方ばかり御心配を掛けて、その證文とやら、ちよいと見せて下さいな。見せるどころか、和女に渡すのだから、はやく障子を閉めて此處へ來るが宜いぢやアないか。いえ、も少しの間、このまゝ、どういふもんか障子の中へ這入ると、すぐに顔が熱くなつて上氣せすもの、また其證文も、いづれ貴方の手から母

に渡していたゞきますから、あとはお預け申しますが、今ちよいと、こゝへ持つて来て見せて下さいましな、それでなけりやア妾は嫌、歸りますよ『いやはや、際どいところで無理をいふもんだ、しかし仕方がない、今夜こゝで御機嫌を損ねちやア堪らないから、ちよッ』舌鼓うちながら障子の外の縁側に立出づれば、お梅なほ欄干に寄りしまゝ差俯いて物おもふ體、太七そツと其背を軽く叩いて證文を差出しつゝ、『さアこの通りだ、ね』といへばお梅しづかに振返りて何氣なく手に受取りながら、障子のうちより漏るゝ火影に照して開きし折しも、さツと吹く川風に南無三寶、ひらくと舞うて闇の流れに散り行きぬ『あれッ』聲もろとも太七おもはず飛上つて『やあッ、大變だ〜』

我を忘れて叫びしお梅よりも、太七は猶更の驚愕、はツと欄干に身を乗り出して兩手を差伸せども、紙一枚の古證文、夜の川風に吹かれて闇を流るゝ水に落ち行けば、今更馳せ出して追ひもならず拾ひもならず、たゞ怨めしげに漕ぎ行く櫓の音を聞いて、これが白晝の大道ならばと口惜がりぬ、

『もし貴方、どう致しませう』『だからお梅さん、家内へ這入つて見なさいと言つたに、とんでもない事をして仕舞つたよ、もし階下の隠居さんに知れると第一この私が濟まないからなア、それにまた和女、あとで母親に文句をいはれた時、此奴が取持ちましたと鼻頭へ突出す證據が無いから、ぐうの音も出ないぢやアないか、しかし、いくら今更ら何と言つても仕様がな、本人の和女が生證文だから』『だッて、貴方の渡しやうが悪かつたからですよ』『渡しやうが悪いか、受取りやうが悪いか、よく考へて見るが宜い、こんな縁側で大川端の欄干に凭れて大事の證文を擴けるといふ事があるものか、しかし、ぐづぐづしてると夜が更けるばかりだ、階下の隠居さんに悟られないうち、さア早く、お梅さん』『はい』『はい』ぢやア

ない、早くよ、つまり本人の手に戻れば反故さ、紙屑さ、散ッても焼けても構ないちやアな
いか」

お梅やうく心うちとけて合點せし風情、そのまゝ太七に作はれて障子の内に入りしが、ば
ツと射す火の光りに今更ら恥かしたや、しばし顔うち赤めて躊躇ひしを、また急かれて階下
に降り行きつゝ、さしうつむいて一室の内に入れば、伊勢屋の隠居まぢかねて飢ゑたる猿の餌
を得し心地、おもはず老の膝乗出して盃とりあけながら、「さア太七、その娘に一杯のまして
くれ、そして好きな物でもあれば手を鳴して注文するが宜い、いや、乃公は大分に酔ッて來た
よ、はゝゝゝゝ」つい貴老、はやく連れて來ようと思ひましたが、何分この通りの初心で、た
ゞ恥かしがッてばかり居りますから、實に手数が掛りましたよ」その手数が掛ッてこそ本望
だ、もし手数のかゝらない女なら何も、かうまでするにやア及ばないさ」なるほど、御道理

で、さアお梅さん遠慮は入らないから、も少しお傍へ寄るが宜い」はゝゝゝゝさう無理に
寄せなくッても、まア今のうちには心まかせにして置くが宜い、とかく年のゆかない女は性急
に遣ッちやア却て呵しくないから、はゝゝゝゝ」

たゞ恥かしさに身を縮めて蠟燭の火に顔を反けつゝ、今まで無言に差俯いたるお梅、やうや
う顔を振上げて四邊じろく見廻しながら、「おや、こゝは何處で御坐いますの、妾とした事
が、妙なところへ來ましたのねエ、全體、何しにまるツたのでせう、夢か知らん」いひつゝ柳
眉を擧めて小首を傾けながら、底の底まで澄み渡るかと思ふばかりの目元に太七を振り返り
て、「たしか貴方は、あの伊勢屋の番頭さんで御坐いましたねエ、しかし、この御老體はどな
た様」持つて生れし色香は風に艱める花に等しけれど、おそろしや、逆も叶はぬ瀬戸際に迫
ッては一念ばツと吹出したる本音、雪の額に天井の節穴を見上げて冷かなる微笑を浮べぬ、

諺にいふ雷に臍を取られし如く、あつと呆れし隠居の面體、たゞ目ばかり見張つて言句なけれど、太七は堪らず憤怒の膝を進めて拳を握りながら、「おい、お梅さん、和女どうしたんだ、氣でも違つたのぢやアないかね」はい、氣が違つてるかも知れませんが、うかく物を仰しやると、いよく變に分らなくなりますよ、どうか今のうち、歸して下さいな
 「な、何だ、氣が違つてる、歸してくれ、おい、ふさげちやアいけない、いくら證文が無くなつても、かう生證文を目の前に置いての上だ、全體どんな奴が蔭で糸を曳くかア知らないが、をかしよう圖に乗つて妙な事をする、身の爲にならないぜ、隠居さんは兎も角、こゝに太七といふ男が附いて居るんだ、時と場合に依つちやア随分、優しくばかりしね、んだぞ、あれ證文の生證文のと、そりやア何の事で御坐います、や此女め、おもひの外の喰はせ物、いよく巧んだな、おや、何を妾が、巧みましたへ、貴方がたこそ、巧んで人の娘を、こんなど

ころへ引出したのでせう、六十を越した大家の御隠居と本所で二一を争ふ大質屋の番頭さんとが、親父の死跡に母子たゞ二人で其日を過しかねる難儀に附込んで、ことし十八の娘を手込になさるならして御覽なさい、妾が生證文なら貴方がた二人も生證六ですから、此まゝ出るところへ出て白いか黒いかを分けていたゞきませうか、それとも伊勢屋の御當主と妾の母とを此家へ呼寄せて五人一座の談話に致しませうか、どちらなりとも御勝手次第
 丹花の肩端かるく轉れども鬢の毛一筋も動かさず、ものしづかに睡れる如き容體すつと起上れば、太七おもはず飛付いて其袖ぐつと掴みぬ、やい待て、どこへ往くのだ、ほ、ほ、ほ、今ごろから何處へまゐりますものかね、一人の母が待つて居りますから龜澤町へ歸りますのさ、そこ放して下さい、いやはや驚いた、面にも年にも似合はない太い阿魔だ、河岸の材木を見るやうに、太いか細いか存じませんが、あまり無理な事を遊ばすと却て、お怪我をなさいま

すよ

水際たちて沓え切つたる兩眼、じろりと見返りながら、胸帯の間より逆手に拔出したる剃刀の光りに、さすがの太七あつと驚いて飛退きぬ、「ほゝゝゝゝ今朝、角の床屋で磨いで貰はうと思つて、つい其まゝ忘れて居た剃刀、それほど怖ろしう御坐いますかへ、外見によらない優しい番頭さん、また御隠居さんの猶更お静で在らつしやる事、いづれ其うち改めてお店の方へ伺ひますから、ほゝゝゝゝ」

大の男が毛脛を現はし聲荒らけて叫ぶよりも、名筆の畫さへ及ばぬ天生の美顔に冷笑を告ぐでの物凄さ、すつと眞白き頸首に柳の腰を据ゑて見返りもせず出て行く後姿はや夜は更けたり、しかも龜澤町へは兩國橋を渡つて人殺しに名高き百本杭の河岸傳ひ、その暗闇の淋しさを現在あの年で唯ひとり歸るかと思へば、なほさら怖ろしき心地して隠居も太七も思はず總

身ぞつと寒くなりぬ、

其六

伊勢屋の隠居と番頭もろとも沸き返る腸を絞つて無念の拳を握りしかど、蟲も殺さぬ今年やうやう十八の處女に斯くまで呑んで吐出されしとは家の面目、身の恥辱、世間への外聞、まして其夜の事を思へば蒼の花の顔しづかに振返りて剃刀を逆手に持つたるほどの女、うかくすれば此上いかなる怖ろしき毒に中らむかと、百兩の證文ないものにして人しれず舌を巻きつゝ驚きぬ、

その隠居よりも番頭よりも更に驚きしは現在の母親、眼前の苦しさに追はれて心ならずも娘の言葉に従ひつゝ、二日と限りて遣りは遣りしものゝ、今年やうく十八の女の身に、何の

毒 婦

工夫も手段もあるべきぞ、身も汚さず無事に證文を取返すとは親を慰めし一時の方便、かはいや心は泣いて六十の坂越えし人に責め落さるゝ覺悟、さぞ今頃は辛からむ悲しからむと枕に涙を流す眞夜中ごろ、門口の戸を叩いて歸り來りしは娘の聲、はッと驚いて飛起きつゝ、そのまゝ引入れては仔細を聞けば、ほゝと笑うて斯うくくと語りし始末に、母は思はず身を震はして驚きながら、母子二人が朝夕、責立てられし百兩の證文、夜風に散りて大川へ流れしといへばそれまでなれど、ものゝ冥加の怖ろしとて深く娘の行末を戒めぬ、

寢覺よからぬ事とは知りながら、さて人しれず過去りし事、まして朝夕たえまなく責立てられし眼前の苦しきも遁れて、其後さらに音なく沙汰なく何の催促なきは、なるほど娘のいふ如く此方ばかりが悪しからぬ證據、彼方にも世間を憚る弱身あればこそと、そのまゝ無事に過

せし五日目の夕暮、お梅は錢湯に出て行きて母親たゞ一人、奥の佛壇に燈明あけむとするころ年ごろ三十前後の一癖あるべき男、ぬツと入り來りて家内を見廻しながら、「大工の彌兵衛さんといふなア、此方ですかね」

ついに見馴れぬ男といひ、伊達袷一枚の素肌に横結びの三尺帶、鷲摺みの手拭そのまゝ肩に軽く載せて、五分月代の額に現はす向ふ疵は、いづれ曰くのあるべき面魂、はや會釋もなく腰うちかけし體に、母親おもはず眉を擧めて小氣味わるけに立出でながら、「どなた様か存じませんが、その彌兵衛は、先々月、歿りまして」いや、彌兵衛さんの死んだなア承知だが、その家は此家かといふのさ、して娘ツ子は居るかね、噂に聞き及んだお梅さんといふなア「はい、只今ちよいと、外へ出て居りませんが、妾が梅の母で御坐います、もし何か御用でも」「しれた事さ、用がなくって知らねエ人の家へ來るもんか、實ア少々、南瓜畑に落ちた風で、

乙に搦んだ用を持つて来やしたが、母親ばかりぢやア埒が明かねエ、しばらく待つて居やせう、お梅さんの歸るまで、おツ煙草盆でも出してくんな、ついでに茶の一杯ぐらゐ、お雜作にあづかりてエなア、酒なる猶更ら結構だが、は、は、は、」傍若無人に高笑ひする折しも、門口より歸り來りしお梅、あらたに湯浴せし美人の本體、さらに一入の艶を増して目も覺むるばかりの風情ぢやア、なるほど、此奴ア大變な尤物だ、思つたよりやア百層倍、化物ぢやアねエが聞いたよりも見た方が凄いな、しかし、まだ人の知らねエ凄腕があるといふことだ、時にお梅さん、ちとばかり野暮なこつて嫌がられに來やしたのさ、まア其上お化粧でもして、いよく美しい御面相を拜みながら、ゆつくらと話してエもんだ」

母親かくと見るより娘に目をもて招けは、お梅そのまゝ奥に伴はれて、母子二人が何をか頻りに私語きし後、あらためて出て來るを浮世馴れたる母かと思へば、さても世間の娘氣とは倒

さごと、ものに怖れて人に恥ぢらふべきお梅、その男の眞正面に坐して會釋しながら、「母は少々、氣分が悪う御坐いますから、何か御用を、妾、いひつゝ茶を汲み出して更に何氣なき體、これほどの曲者こゝに居るかと思ふ顔色もなし、

世間普通ことし十八の娘といへば、この面の向疵を見ても怖れて遁隠れすべき筈、それを湯歸りの不意に見て更に驚く色もないのみか、ぐつと胸前を抉るほどの文句ならべても平氣の體、しかも目の色かへて氣遣ふ母親を奥に隠して押へながら、鬼でも蛇でも一切その身に引受けむと、思ひきつて敵の眞正面へ坐したる不敵さには、さすがの男も聊か案に相違して鋒の鈍りし顔色「なるほど、お梅さん随分と宜い度胸だね、いくら何でも高が十八の處女だ、これほどぢやアあるめエと思つたよ、しかし、その太いところを見込んで、こまなくした段取は言はねエ、萬事さつぱりと裏も表も明放して實ア斯うだ、五日前の夜、柳橋の伊豆屋の二

らるだが、証文の手前、さうもなるめエから、百兩だけの嫌な事をいふのさ、伊勢屋の隠居や番頭に頼まれたなア、お梅さん、恩に著せるぢやアねエが、こんな手ぬるい談判ぢやアねエんだよ、それでは、どう致せば宜しう御坐いますの、貴方の思召通り、お指圖をして、いたゞきませう』『いやに御丁寧な挨拶だね、此方の思召通りお指圖をしていたゞく柔和な女でもなからうよ、は、は、は、しかし不意に拾った百兩の証文、金で耳を揃へて今すぐに出せの、この家を此まゝ明け渡せのと、そんな野暮は言はねエから、時と場合相應の返答するが宜からうぜ』それでは、お氣に召しますまいが、かうしていたゞきたう御坐います、その証文通り此家を明渡しますから、どうか貴方の手で此家を賣つて、あすから母子二人が身の置場もない妾どもへ、そのうちの幾何か、せめて二十兩とか三十兩を下さいますまいか、慾を申せば半金もいたゞきたいのが眞實のところ、手軽う申せば、落す筈のない証文を風に散

して落した主があればこそ、拾ふ筈のない川中で拾った人もあるといふ道理で、あの山分とやらいふものに願へますまいかねエ、は、は、は、其上また、お心易くさへしていたゞけばいづれ御恩も返しますから、つまりは伊勢屋さんが身代の爪の垢にも足らないほどの御損で、われ／＼は思ひもよらぬ半分づゝの幸福、ねエ貴方』いひつゝ、鐵も溶けむばかりの目元に情の色を含んで見遣れば、いつしか魂魄を奪はれて酔へるが如く、しきりに首肯し果は思はず横手を拍ちながら、『一言もねエ、眞向梨割、青竹を兩断にしたといふなア全く此こつた、聞くばかりでも氣味が好い、いくら褒めても譽め足らねエが、お梅さんこの様子で二十四五にでもなつた曉は、随分おツかねエ女だな、逆も野郎は叶はねエ、萬事その面で押すんだもの、は、は、は、は、は』

其七

母 婦

江戸の大川、流るゝ隅田川の永代より吾妻橋までの間を通ふ家形舟、猪牙舟、網舟、渡し舟
 およそ客の懐中に挿さすものを一切の我子分として、年中の冥加錢いちちく上汐の勘太と呼
 ばるゝほどの男が、ぐツと握りし百兩の證文、鬼を相手に地獄の底まで鑑一文も取外れのな
 い筈を、お梅が丹花の唇に嚙られて横手を拍ちつゝ、ころりとまろりしのみか、百兩の家を
 七十五兩に賣り急ぎながら、わくゝ半金として五十兩を持ち來りし時、お梅ほゝと笑へど
 母親おもはず顔色を變へて驚きぬ、

さて請取りし五十兩そのまゝ再び勘太の手に戻しつゝ、お世話ついでに男と見込んでの御依
 頼これを此まゝ喰潰さうよりは、幸ひ兩國の水茶屋に空株あるとのこと、萬事よろしく母子
 二人が身の立ちますやうにと、おそろしや一度ならず二度ならず責來る敵を味方に取つて追
 使ふお梅の心中、いづれ此まゝ濟まぬ奴に用の切目は此方の愛目と思つての業ながら、それと

は知らず勘太いよく飛上つて力瘤を入れ、水茶屋は借置き火の車の茶屋でも何でも兩國の
 河岸は我繩張、皆までいふな委細きくに及ばぬ男一疋、たしかに引受けたと、俄に馳せ廻つ
 て日夜に取急ぎつゝ、軒を並べし十二軒を順に追ひ送りて橋の袂の目貫を空けさせ、宛から
 先祖代々の本尊佛を迎ふが如くに立騒ぎぬ、

淋しき場末の片蔭に其身を飾らで暮せし時さへ、塵塚の鶴、龜澤町の名物お梅の風聞、立ち
 しほどの色香、まして今は江戸随一その兩國に鬼も十八の化粧を凝して現はれしかば、見る
 もの萬人いづれも忽ち本性を失うて狂ひつゝ、家も庫も生命も入らぬと朝夕に寄せ來る客の
 人波を、ものゝ數ともせざる天生お梅の働き、いちちく引受けて手鞆に取るが如く誰が教へ
 ねど言葉は自然に備はる殺し文句、わざとならねど愛敬は人の腸を搔搔るほどの風情、惜し

や此まゝ日本一の大廓に抛け込んでも色の世界の五町まち三界に名を得し傾城も及ぶまじとの取沙汰、いつしか江戸市中に聞えて兩國の四季不斷の花と唄はれぬ、

白晝は兩國の水茶屋に一入の色香を粧ひつゝ、男冥利に我こそと寄來る萬人の戀を惱せども夜に入れば人しれぬ塙と定めし横山町の路次裏に歸りて、わづかに膝を容るゝばかりの一室なれども昨日に變る今日の氣樂さ、母子たゞ二人が手足を伸して身の疲勞を休めながらの物語り、「ねエお梅や、世の中は妙なもので何が僥倖になるやら、あの龜澤町で毎日々々伊勢屋さんに責められた時は、あすが日にも泣きの涙で乞食になるかと思つたが、その苦しさが基因で、またあの勘太さんに吐鳴り込まれたのが却て今日の端緒、これといふも皆和女一人の活動だがね、此上は何卒、もう、あんな危い怖ろしい氣になつておくれでないよ、店を出してか

ら、やうく一月たつが経たない内でさへ、これほど繁昌して氣樂になるんだもの、第一が今までと違つて、世間へ顔を晒しぬく客商賣だから、もし呵しな事でもあると、ねエ、それも以前のやうに其日が立行かないとか、背に腹は代へられないとかいふ事でもあればだが、ねエお梅『あれさ、おツ母さん、妙なことを、何も妾が、さう悪いもんでもないにねエ』いゑさ、決して悪いといふんぢやアない、悪いどころか、母のために氣を揉んで、いろく心配した上、こゝまで漕付けてくれたんだもの、全く心中では禮をいうて、お佛壇にも自慢してゐるくらだがね、あんまり人が大騒ぎをして店が繁昌しすぎるから、末を案じて餘計な氣苦勞もするのさ、現在の勘太さんだつて、自分の損得を捨置いて人の難儀を救ふといふ性質でも無がらうぢやアないか、それが和女、あの通り一生懸命に力瘤を入れて、親身も及ばないほどの世話をしてくれるには、どうせ心の底に、何か一物あるに違ひないよ、實は斯う俄

に店が繁昌して和女が名高くなるに付け、猶更ら心配だよ、いつ何時どんな事を言込まれやアしないかと思つてねエ』ほゝゝゝそれくらゐの事は、おツ母さん、最初から承知で、いつ何時、どんな鐵砲の火蓋を切られたツて少しも驚かないやうに、そツと工夫がしてあるから、まア氣を揉まないで平氣に居なさいよ、兎も角この調子で一年も経てば、おツ母さん一人が生涯安樂に暮せるだけの物は出来ますからねエ』なるほど、ねエ、和女のことだからまさか、うか／＼人の術に落ちて困るやうな氣遣ひはなからうがね、全體その工夫といふのは、安心するため、聞かして置いてほしいよ、いくら聞いても役に立たない母だが、何ね、おツ母さん、さう大した理由でもないの、つまり勘太さんが本音を吹いた時の喧嘩相手を拵へてあるのさ』えゝゝ、何とお言ひだ、喧嘩相手を拵へてある、お梅、また和女』おツ母さん、また和女と心配さうな、お顔ですがね、こゝは能く聞いて下さいよ、最初から眞實この妾等二人

が可哀さうだと思つて、全くの男氣で世話してくれたのなら、また此方も其氣で、どこまでも有難く恩にも著るし、時と場合の成行次第に依つては義理人情の欄にもかゝつて、生涯の依頼にせまいもんでもない筈ですが、肥して置いて喰はうといふ奴に、をめ／＼誰が黙つて喰はれますもんですかね、だから今の水茶屋を出して四日目、この兩國橋を境に淺草見付から日本橋界限まで一手に握つてる賣出しの大男、もとは上州の安中生れで本名は勝藏ですが、俗に上州勝、また鬼勝といふ人の家へ、そツと泣込んで、實は斯う／＼と萬事の始末を打明けて頼んだところ、あの河童野郎は水の上ばかりで陸の上ちやア半文の價値もねエ奴だが近來そろ／＼河岸ツ端から這上るといふ風評だ、假令そんな事がなくツても一度は突いてやらうと思つてる折柄、よし引受けた安心するが宜い、いくら何でも年端のゆかねエ女を茶碗蒸にするたア意地の穢ねエ奴だ、眞正面から戀を仕かけて暴れ込むより太エ奴だ、然し萬事が男づく

で通す上州勝が女を中間に置いて文句もいはれめエから、まア勘太の本音を吹くまでは手を出すめエ、もし吹ッかけたなら直ぐに断込め、後盾となつて指も差させねエのみか、あの水茶屋に乃公が力瘤を入直して今より百層倍にしてやると、おツ母さん、まア斯ういふ理由でね、ですから安心して下さいよ、また妾だつて、あの勘太さんが妙な奥の手を出しさへしなけりやア、これまで世話になつた恩は恩で忘れない決心、かとこころで勝といふ人も、鬼勝と呼ばれるくらゐですから、親か兄弟のやうに安心も出来ません、が、まだ兩國の水と陸で名を取つた二人が雙方から睨み合つてくれる間は、兎も角も無事ですから、ねエ、おツ母さん、もし二人の睨み合ひ持合で不安心なら、毎日々々いろんな人が来るんですもの、その中で、も一人生命しらすの武士か何かを引入れて、巴のやうに三方からの掛合で、鼎のやうに三脚を据ゑて、どっちへも轉ばない工夫がありますさ、ほムムムム

蟻は見えねど甘きに集ひ人は叶はねど戀に集まる、軒を並べし兩國の水茶屋十二軒あれども、お梅が色香に奪はれて空照る月夜の星に等しく、兩國の全盛たゞ一人で占むるかと思ふばかり、けふも朝より立替り入變りて絶間なく詰掛けし客足も、はや傾く夕陽に人浪の汐合いつしか去りて、ほつと息つきながら、これさへ浮きたる人の心を撈る玉の腕の濤を外せし折しも、湯歸りの伊達姿これ見よがしに入來りしは上汐の勘太、ぬつと我物顔に奥の床几へ腰うちかけて、刻の故か一時に込合つて爪も立たねエやうに騒いだ有象無象が、いつの間にか消えて無くなつたのが妙だ、もう日の暮れるに間もあるめエ、さアこれからが御骨休みだ、はムムムム

人の世話した後に顔を見せぬは懐かしけれど、これは世話した恩を鼻頭にぶらつかせての自

慢顔、あゝうるさいとは思へども眼前浮世の義理、お梅は一人の愛敬を浮べて、さも嬉しけに會釋しながら、「おかけさまで、日にく繁昌いたしましたね、この調子では、逆も妾一人で無効ですから、どうか外に手傳女でも御坐いましたら、お願い申します、ほゝゝゝゝい
 や、その邊の事も考へねエぢやアないから、まア萬事この乃公に任して置くが宜い、しかし物は足らねエところに味があるのさ、氣轉の利かねエ腐れ阿魔が十人二十人居たつて何の役に立つもんか、やはり此まゝ名物は一人で持切つてよ、手の届かねエところア、ちよいくと其目元の愛敬だけで澤山だ、はゝゝゝゝしかし多くの中ぢやア随分と色の生ツ白い奴もあるから、お梅さん、浮氣を出しちやアいけねエせ、淺草の觀音様も萬人一様に願かけの利かねエで持つたものさ、同じ賽錢で一人に利益があつて見なせエ、とツくに雷門へ蜘蛛の巣が張るよ、はゝゝゝゝ」

をりしも一人また入來りし伊達男は、五體の急所いづこにあると人に怪まるゝ上州勝、年ごろ四十一二の大兵に兩眼の光輝ぎろく泣く兒も止まる威勢、すつと此方の床几に腰うちかけながら、「おツ、茶よりも水だよ、大きな器で水を一杯、同じ酔覺の甘露でも此家なアまた格別に美味からうさねエ、はゝゝゝゝいつ見ても美しいもんだ」
 時も時、はつと思へど、いづれ一度は噛合すべき二人の勝負、ついでに序幕を見て置かむもの、お梅は更に何氣なき風情、なみくと大湯呑に水を汲んで差出しながら、「宜い御機嫌で御坐います事ねエ、もし何なら幸ひ今は客も絶えて居ますから、つい其處で貴方お横におなりなさいましな」うめエもんだ、資本の入れねエ舌の鋒で突いて置いてさ、其上を天生の美貌で殺すんだもの、はゝゝゝゝ全體どこで修業して來た、年は十八で全くの處女といふこつたが下ッ腹に毛のねエ四十島田の莫連女も及ばないぜ」はゝゝゝゝお世辭の宜い事を仰しやるよ、

此ごろは女の方より殿達の方が油断がならないといふ噂です。は、は、は、油断がならぬエと言やア、かう、お梅さん、氣を附けなよ、ちよいと物の比譬が、乃公のやうに四十の上を越して、さんざ好きな事をして来た曉ちやア、もう忌味ツたらしい色戀沙汰も薄くなるがね、やうく、此ごろ河岸ツ端へ手をかけて這上らうといふ野郎なござア。鉞よ、あの鉞といふ奴、上の方へ向ッちやア更に効のねエ弱蟲だが、うぬより下の方へ向ッちやア重量も刃金もあるから無闇に押し切つたがるのさ、だから氣を付けて鉞野郎に押し切られぬエ用心するが宜いぜ、とかく驅出し奴は人の弱味に附込んたり恩でもねエ一時の恩を鼻にかけて、とんでもねエうるせエ謀反を起すもんだよ、ねエ、は、は、は、つまらねエ奴の喰物にならない防禦が肝要だ、いつまで無疵の名物お梅で居なせエよ、まだ其上の慾を言やア、こゝは一番、その年齢を美貌で男嫌ひといふ名を賣らしてエもんだ、兩國で名物お梅といはれるのも結構だが、

すばと抜けてさ、江戸で奴のお梅と言はせてエなア、あんまり伶俐で美し過ぎるから、親類でも何でもねエが、たゞの女で通すのが惜しいよ。

互ひに名を知り顔は知れども、水と陸とで言葉を交せし事なければ、上沙の勘太じろく見遣りながら、しらぬが佛の唐變木め何を吐しやアがる、今更ら急に遅蒔の種を植ゑても無効だ、これこゝに乃公が居るぞと冷かなる笑を含んで、しきりに煙草の輪を吹きしが、どうやら此方へ嫉妬の刃を向けて来た様子、やうく、此ごろ河岸ツ端に手をかけて這上る野郎に喰はれるなと聞くや否、ぐツと癩癩に徹へて身を捻りつゝ顔色を變へぬ、「おい、お梅さん、湯呑の水ぐらゐちやア無効だ、その手桶を頭上から、ぶツかけてやんなよ、よほど熱が出る様子だ、手桶の水で足らざア武藏一番の大水、この隅田川へでも蹴落してやらうか、は、は、は、今日に限らねども幸ひ通りがけに彼奴と見て取ッて入りし鬼勝、固より萬事かくとは覺悟の前

じろりと横目に睨んで片手に顔を撫でながら、「こゝは陸の上だ河童野郎め、土左衛門の尻の穴ばかり吸ふ分際で、ふざけた事をいふな、年中びい〜と水の上で冷切った五體たア違つて、血の氣の多い身體にやア熱の出るもんだ、骨のねエ半丁豆腐の冷し奴め、腐らねエうち引込んで仕舞へ、上汐も退汐もあるもンか、うぬ等ア底の藻屑の泥ン坊よ、だほ黨にでも文句を並べろ、男の中の男に向つて言葉を交すなンぞア推參至極だ、お情に喧嘩の眞似でもしてやりてエが、あんまり相場の違つた役不足で手が出ねエわ、は、ムムムム」

大きくより上汐の勘太いよく、目色を變へて、くわツと赤らむ憤怒の顔色、「陸の上の芋蟲、どこが頭か尻か分らねエと思ひの外、やツぱり口があると思えて何だか吐すわ、吐すも宜いが役不足で遁腰の前口上が哀れだ、手が出なきやア足でも出せよ、井戸端の踏張り喚アぢやあんめエし、文句澤山の口端ばかりで埒が明かねエ」うかノ、物をいふな、鬼勝だ、埒が明いた

ら生命がねエぞ、うす闇がりの缺茶碗で切つたのか崩れた石垣の形見か知らねエが、その面の向ふ疵ぐらるなこつて濟まねエぞ」濟む濟まねエは後のこつた、おツ上州勝、出ろ、戸外へ出ろ」やかましい、しづかにしろ、うぬ等ア敵手に立騒いで出るも出ねエもあるか、此まんまで宜いから、さア來い、鬼勝が腰かけた尻を一寸でも上げて見ろ」は、ムムムおけおけ、手も出ねエ役不足から尻の上げ下しまで聞きやア澤山だ、うてば響く奴を敵手にしてこそ少しやア氣も乗るが、遁腰一點張の舌喧嘩ぢやア張合がねエ」張合がねエ、わからない奴だな、うぬが身の爲を思つて手加減してやるんだぞ、しかし、それほど希望なら、さアどこへでも出てやるから覺悟を極めて來い」は、ムムムムやう〜のこつて諦めが付いたな、さア出ろ」

兩人もろとも思ひきつて起ち上る勢ひに、かねて覺悟のお梅も今は其まゝ空ふく風ともきか

れず、はつと呆れて驚く風情に二人が中間を隔てながら、露を含める花一輪の嵐に揉まれて、
 惱むが如し、『あれまア、貴方がた、どうか暫く待って下さいまし、これがお二人の身の上で
 男づくに出来た事なら兎も角も、どうやら妾の事から、その上ここで互ひに妙な意氣張にな
 りましては、ひよんな事で雙方お名前が出るばかり、時悪し場所も悪し事の起因も世間の
 手前、あんまり軽いやうで萬事お氣の毒さま、ねエ、ほムムムムいッそ水に流して下さい
 ましな』いひつゝ玉の腕に勘太の胸を押へて慰めし後、其まゝ身を翻へして鬼勝に向ひつゝ
 目に物いはせて頻りに縋り付けば、『また幸ひの通腰と吐さうが、なるほど、さうだ、つまら
 ねエ端た野郎と叩き合ッちやア却て此方の恥辱だ、こゝは一番お梅さんの留め女で乃公から
 退くとせう、しかし勘太よく聞けよ、これを今日の御縁で乙な由縁を結んだ以上は、いつか
 また赤エ酒でも酌み交すから、なるべく馳走の用意して待って居ろ』待つにやア及ばねエ、

いつ何時でも馳走してやるから遠慮なしに出て来い、煮殺しか叩き膾が生づくりか、魚ア其
 方のもんで料理は此方の腕だ、組板に乗った時、吠面かはくな』いやに御念の入った野郎だ
 もう文句はねエか』あつても此家ぢやア無効だ、あらためて出直さう』其時、ついでに勘太
 しやツ面を洗ッて来いよ』うぬも鼻アに死水とらして出ろ』はムムムどこまでも恍けた奴
 だ、ぢやア勘太、忘れるな』はムムムどこまでも間抜けた野郎だ、ぢやア上州勝、忘れる
 な』

さすがに男と男、其まゝ更に一言もなく、たゞ雙方よりお梅に對うて笑を含みしのみ、いざ
 と等しく腰うちあけて互ひに立出でつゝ、見返りもせず右と左へ分れ行く後姿を、お梅しづ
 かに見送り見分けて暮かゝる空を仰ぎながら、獨言、あゝうるさい鴉だことねエ、

其 八

毒 婦

馬の背を降分くる夏の夕立、さつと落来りて十二軒の水茶屋いづれも一時に込合ひしが、また晴れ行く空に夕虹に立去りて暫し客の絶えし時、兩國橋を渡る人の足音俄に轟いて、それ喧嘩だ斬つた殺したと立騒ぐ折しも一人の武士が拔身の血刀さけて隣屋の水茶屋に駈入りしが、きやつと叫んで女どもの驚く聲に其まゝ立出で、お梅が方に入り来りぬ、

「相對喧嘩でない、身分あるものゝ無禮討だ、暫く休息させい」いひつゝ奥の床几に腰うちかけて、重ねし懐紙を取出しながら血刀を押し拭ひつゝ、鞘にをさめて息をつく體、みれば年ごろ二十三四の水際たつたる美男、今しも人を斬りし血氣の勢ひ、なほ残りて眉毛おのづから逆立ち目尻さへ釣上りたるまゝ、やうく指頭二本を入るゝばかりに剃立てたる大鬚の元結きれて肩に亂れ、雨に濡れし黒絹の羽織は引裂け、茶鶴の袴に飛び散つたる血汐の痕、まだ追ひ来る奴やあると物凄く四邊を見廻しぬ、

平生は廣小路の見世物小屋に出でて天晴れ女相撲の關取に劣るまじき隣屋の茶屋の女どもがきやつと驚き倒れて泣叫びしに似もやらで、風にも堪へぬ風情のお梅が更に顔色も變へざるのみか、かゝる時には茶よりも水と大湯呑に汲み入れて差出せば、武士は首肯いて一息に飲乾しながら、その顔じつと見詰めて小首を傾けつゝ「よく氣が付いた、こゝは其方一人か、迷惑はかけんぞ、暫く此まゝ何事か存じませんが、どうか御ゆるりと遊ばしませ、あれ御召物が『いや〜構はずと捨置け』もし、あまり端近で御坐いますから此方に、こちらに衝立の蔭が『は〜ム〜ム〜芳志は忝ないが、隠れるに及ばん、此のまゝで』

はや門口に見物の山、その人浪を掻分けて一人の中間、木刀片手に飛込みながら、俄に振返つて憤怒の聲「いやい〜何を見るんだ、片ツ端から叩き付けるぞ」叫ぶや否、木刀ふりあげて立向へば、わつと驚いて一時に遁け出すを、見返りもせず武士の前に跪きぬ、「仰せの通り

只今、橋詰の役人へ委細を届けましたところ、御身分がら萬事お構ひなくとの事で御坐います。『む、それでよし、して五人の奴は如何いたしたな、あのうちの二人は慥かに、やツた筈ぢやが』御意に御坐います、二人の奴は腰車と大袈裟で其まゝ落命、あとの三人も半死半生の體で、これも一命は『は、ム、ム、ム』逆も覺束なからう、さてくおのれの身も顧みず無法千萬の奴ぢや、時に要助、只今となりの茶屋へ駈込だところ、あまり女どもが驚いて騒ぐから其まゝ出て此家へ休息いたしたが、あの女なかく、外貌の外に落付いて、早速水など呉れたぞ』きくより要助おもはず振返りて今更に心付けば、お梅そのまゝ又もや湯呑に水を汲で差出しながら、『おや貴方、いつも御最眞に』む、お梅さんか、あんまり慌て込んで氣が付かなかつた、こりやア乃公の御主人だ、よくまア驚かないで御世話をしてくれた、實アね、本所の御親類へ今日お伴して同向院の前まで歸つて來ると、間盜奴が田舎の老爺らしい懷中を搔

ツ攫つて遁出す途端、若旦那様に突當つたから直ぐ其まゝ引ッ捕へて、すられた懷中物を老爺に取返してやツた時、よせば宜かつたに乃公が横合から木刀で叩き倒した上、いやといふほど蹂躪つたのを同類の奴が蔭から見居つたんだらう、兩國の橋の上まで來ると、前後から五人で不意に出やアがツて目先の見えねエ馬鹿な奴さ、ほつと出の勤番者か尋常のサンピンと思つて取ツかゝつたから堪らない、やツといふ間に五人とも忽ち御刀の錆よ、は、ム、ム、ムしかし、まづお怪我がなくツて重疊だつた、相手も相手に依りけりて、萬一あんな奴にたとへ摺疵でも、おさせ申しちやアこの乃公が濟まないからなア、え、若様、こりやア下僕が本所へ御使者にまゐります度に、いつも休みます水茶屋で、あの女は梅と申しまして、近ごろ兩國名物の一つに數へらるゝ愛敬女で御坐います、おいお梅さん、どうか此お羽織と袴を、お脱がせ申してね、すぐ駕籠を一挺、備つてくれないか、上二番町の大林様といふ御邸宅ま

でだ、なアに宜いよ水は乃公が汲んで御洗足するから』いひつゝ、鹽を持ち來りて主の足を洗へば、お梅は背後より羽織を取りながら、御免遊ばせと自己が櫛もて亂れし髪を搔上ぐる風情、追はれて遁けしが又もや立戻つて門口より窺ふ見物三四人、おもはず畜生々と叫んで地踏鞠を踏みぬ、

亂れし頭髪を取上げし後、俄の夕立に濡れし上を五人一時に攔んで引裂けたる羽織と、血汐の飛かゝりし袴とを重ねて丁寧に疊みながら、要助に渡して其まゝ走せ出でつゝ、駕を備ひ來りしお梅が始終の立振舞、さらに慌てず狼狽へず顔色も變へざるのみか、花の顔いよ／＼

冴えて萬事に行届いたる體を、武士は無言のまゝに打守りて今更に驚き怪みぬ、やがて來りし駕に打乗り、お梅に會釋して要助を招きながら何をか私語けば、はつく／＼と答へて幅紗包を受取りつゝ、その駕を見送りて内へ入りぬ、『お梅さん、今日は唐突に、とんで

もない世話をかけたの、しかし和女が萬事の働き振を、よほど感心して居なすつた様子だぜ、此方は斬るべき奴を斬つてさ、また身分が身分だから大道の衆中で面倒と思つて休息に這入つたんだが、和女の方ぢやア何が何だか理由も分らず不意に血刀を提けて飛込んだのだからねエ、それを和女その年で其美顔で、少しも驚かないで、いろ／＼行届いた手際にやア第一この乃公が恐れ入つたね、聞きやア隣屋の阿魔なんざア二三人も一時に石臼のやうな腰を抜かして轉がつたとかいふぢやアないか、はゝゝゝゝ時にお梅さん、こりやア少しだがね、まづ今日のお茶代さ、いづれ近日あらためて乃公がお伴して來るよ、其時また何とか御自身で禮をなさるだらうからね』あれ貴方、こんなに大したお金を、お茶代なら、お茶代のやうにして、いたゞきませう』いゝよ、宜いから取つて置きなさい、いつも乃公が本所の往還に、思ふやうな茶代も置けないから、こんな時に總勘定するのさ、はゝゝゝゝ』それでは貴方、

兎も角お預かり致して置きます、まるで今年中の前勘定を、いたゞいたやうですわねエ、なアに和女、お持合せさへありやア、まだく下さるところだよ、何、何だ、お名前か、お名前は大林小三郎様といッて二千石取の御旗本の御次男さ、親御様は守名のある方で、お兄様は將軍家の御側で、飛ぶ鳥も落す勢ひだ、わけてあの小三郎様は番町きッての美男で、俗に業平小三郎と仇名を取つたくらゐだ、お梅さん、お梅さん、おいお梅さん、あれ、何ですよ妙に人の顔を『罪だぜ罪だぜ、若旦那様が今日の和女に感心なすつた御様子といひ、また和女が、あの頭髪を搔上げて居た時、門口の方で堪らず畜生々々と叫んだ奴があつたぜ、おいお梅さん』『え、知りませせんよ、しかし、お歸りなすつたら、どうか殿様に宜しう』『や、すぐ、さう切込むから恐ろしい、ぢやア近日また来るよ』必ず、お待ち申して居ります』

大林甲斐守の次男小三郎、ことし二十四歳、まだ部屋住の身ながら、親にも兄にも劣らぬ器量ありとて人に持囃さるゝのみか、そのころ江戸に名高き千葉の門下にて五本の指に數へらるゝほどの武藝者、かつは天生の美男、ならぶものなければ誰いふとなく業平小三郎と仇名すれど、描ける業平よりも一入の寝味を帯びて苦味走りし男振、しかも氣は猛く心は武張つて物に怖れぬ本性、鷹に似たりとて準の小三郎とも唄はれぬ、されば今日いかに力業ばかりの下種とはいへど、兩國の橋の上にて前後より不意にかゝりし五人の奴原を、電光石火の働き目にも止らず物の美事に斬斃したる勢ひ、太平の世には思ひの外に人の膽魂を冷して、残る屍の斬口を改めし時は猶更ら天晴の風聞に立ちぬ、

兩國の事ありし後の三日目、小三郎たゞ一人おのが部屋の縁端に立出でて、かの要助を庭口

より呼出しながら、「要助、妙な事を尋ねるが、過日の時に休んだ兩國の水茶屋、あの娘は全體、何者だ、年端もゆかず顔にも似ず、なか／＼氣の確な女で、始終の振舞いかにも不思議に思ふが、あの時の様子では、其方、前々から知って居るやうだな」へエ別に懸意と申す譯でも御坐いませんが、あの砌、ちよいと申上げました通り、本所の御親類へ度々お使にまゐります節、いつも立寄りまして、それがため、へエ、名は梅と申して今年やう／＼十八で御坐いますが、仰せの通り、萬事なか／＼行届いた恰憫者で、第一あの美貌で御坐いますから、近ごろ兩國の名物お梅といふ評判女で、「あの時は、たゞ持合せばかりで、其後、さして禮も遣はさず、どう致したものであらう、何か物でも整へてやらうかな、但し金子でも宜からうかな」さやうで御坐います、元來が水茶屋で、客の休息いたす度に幾何づつかの茶代を當て、居る家業で御坐いますから、勿論、金子で宜しう存じますが、御身分柄、さて何か

反物の類、頭髮の飾り道具か、とにかく御思召の長く後へ残るものが喜びませうかと考へます」なるほど、では其方、何か見立て、調へた上、持參して遣はせよ」恐れ入りますが、同じことなら、お忍びで御氣晴しかたく、如何で御坐います、日中は熱も厳しう御坐いますし、また店に客も込み合せて居りませうから、涼風の立ちまする夕景に「は、は、は、は、過日は血刀をさけて不意に飛込み、今日はまた扇子を使ひながら、さして用もないに行くは異なるの、しかし兩國の夕景色といふものを三四年來さらに見た事がない、幸ひ、行かうかな」お邸宅とはまた格別、丁度あの茶屋の裏側が隅田川に沿うて居りますから、夕風を追うて涼み舟などの通ひます體、また兩國の橋を横から斜めに水七分のところを見渡します景色、お茶でも召上って御覽になりますれば、第一お氣の御保養にも「は、は、は、は、要助なか／＼效能書が上手だ、しかし遣はす品は「いや、それは只今のうちに調へまして、お供の節、持參いた

しますやう「萬事、其方に任すから、あの娘に似合の物をな」その邊は要助、如才は御坐い
ません」

今日に限りてお梅は心地わるしと、晝ごろより店を閉ちつ、横山町の路次裏なる家に歸りて
身を横へしが、さりとて寝るほどの事にもあらねば、また起き出でて氣を取直しながら、母と
差向うて何をか語れる夕まぐれ「兩國に茶屋を出して居なざる、お梅さんの宅は此家ですか
ね」きくより母は娘と顔を見合せながら、そのまゝ振返りて「はい、手前で御坐いますが、ど
なた様で「いや、お目にかゝつたら分りますもんで」いひつゝ、格子戸を引開ければ、お梅そ
れと見て忽ち會釋しながら「あら貴方ですか、今ごろ何の御用で、第一こんなところを、よ
くまア御存じで「兩國の方へ往つたところが、いつにない事、店が閉してあるから、となり

の女に聞いて來たんです、お梅さん、ちよいと耳を貸して貰ひたい」

今までは客の中にも風次第に散り來る木葉客、たゞ風體に武家奉公の中間と知るのみなり
しが、その主人といふを思はぬ事に一目みてより何とやら、この要助まで俄に餘所ならぬ心
地して、お梅そのまゝ立出づれば、要助そつと差寄りて耳朶に何をか私語きけむ、ふしぎや
心の一物さらに大の男も及ばざる女ながら、流石に今年やうく十八のお梅、ほつと目元に
薄紅を帯びぬ、

要助あらためて持來りし反物と別に一封の金子を差出しつゝ、「お梅さん、こりやア過日の御
禮で、どうせ氣にやア入りますまいが、常著にでもして下さい、またその一封はね、何か頭
髪の道具でもと主人から言付けられたんですが、わからない男の見立てるより、本人で好きな
物の方が宜からうと思つて、はゝゝゝ先達、あゝ澤山お金を戴いた上、また斯んな御心

毒婦

益

辻にお待たせ申したの橋の上だのと、なるほど嘘だ、實ア夕景から和女の茶見世へお供したところ、今日に限って戸が閉てゝあるから、仕方なしに柳橋の鈴本といふ船宿へ兎も角も御案内して置いたのさ、いくら過日の禮があるたアいへ、お梅さん、あの御身分で、わざわざ上二番町から兩國くんだりまで来ようといふ思召だもの、あんまり平生の一流で、萬事を人なやませの思はせ振、すけなく跳ツ返しちやア情が無さ過ぎるぜ、ほ、ほ、高が水茶屋家業で、妾のやうな女に何が『いや、さうでない、此奴ばかりは別だ、上も下もあるもんかね、さア、文句は後にして行かう』行きますがね、もし御酒なぞ出て、あまり長くなると困りますよ、妾は兎も角、御身分から御迷惑な風聞でも立つと申譯が御坐いませんから、とかく人といふものは、いろんな事を騒ぎたがるものでねエ、妾が、あゝ固くして居てさへ、御苦勞千萬に、つまらない餘計な詮議立をする人があるんですから』は、は、は、當然さ、鐵の函を

三重にして四方から錠前を卸したって、透き通るほどの美貌だもの、誰が無事に置くもンか、やかましう言はない奴は木か石さ』そんな事を仰しやると本當にうけますよ、本當といへば本當に、あの方はどんな御氣性、お見かけ申したところは、お優しいやうですが、一時に五人も人を斬つて落付いて在らつしたほどですから、嗚、第一、妾がね、水を差上げた時、手の指も震はず、しづかに取つて召上りましたからねエ』きくや否、要助おもはず俄に振返つて、お梅の顔を今更に見詰めながら、『侍が不意に五人も斬つて落付いたより、十八の處女が、すぐ水を持つて出て指頭の震はなかつたところまで見届けるたア、お梅さん、實に驚いたもんだな、何だか怖いやうな女だな』

柳橋の船宿、鈴本の二階に大林小三郎たゞ一人、端近く出でて夕暮の川風に身を吹かせながら、懷中より謠曲の小本を取り出して幽に唄ふ折しも、要助まづ上り來りて笑を含みながら、

「下されもの本人に遣はしました上、一應お禮のため只今、階下まで召連れまして御坐います。『むゝさうか、あけてやれ、其方も今日は一座で飲むが宜い、無禮講だ、その代り當家の女ども、一切無用にして、祝儀だけ多分に取らせよ』はッと答へて要助そのまゝ階下に行きしが、やがて伴ひ來りしお梅、血刀の時は驚きもせて今日は却て何とやら、顔うち赤めて差俯ける風情、しづかに身を縮めて兩手を支へながら、『過日は、まことに不行届きの事ばかりそれに其節、過分の御茶代を下さりまして、また今日は、いろ／＼の下されもの』は、ム、ム、禮を申すほどの品ではない、しかし今日は迷惑だ、どう致しまして、萬事、この通り、不束女で『いや／＼過日の始末、なか／＼歴々の武家生育にも珍らしいくらゐの振舞、感心いたした、さアすツと、これへ來て、要助、涼しい方へ廻してやらんか』いえ／＼これで結構で御坐います』お梅さん、あゝ仰しやるんだから、御免蒙ツて、そツちの涼しいところへ出

るが宜いちやないが、こゝは御邸宅と違ツて、いはゞ御氣晴しに入らしツたのだから』『あれ何を遊ばすんです』これ要助、さう背後から突く奴があるか』へムムム立ツて働く時は人並すぐれて身の軽い女で御坐いますが、かう坐つた時は、なか／＼動かない重い尻で、いや重い臀ですから、ちよいと、ツツつきましたので、お梅さん、ぐづ／＼してると、また突出すよ、三度目には捻るぜ』

やがて運び出でし用意の酒肴に、要助一人が咽喉を鳴しつゝ座を持つての働き振、小三郎も元來が上戸ならねば數盃を傾けて悠然と酔ひし體、お梅は猶更の下戸、やう／＼強ひられて一二杯を重ねしのみ、はや満面ほツと染出す紅に雪の額の生際いよく／＼白く際立ちて、指の爪頭まで色つきつゝ果は息さへ急しう、堪へ兼ねる風情にて縁の端近く膝行り寄りながら、いつしか欄干に俯して吹き送る涼風を襟首に通はせ、をり／＼の忍び目に小三郎を偷み見る

體、しるや知らずや此方も酔うて縁の柱に背を持たせつゝ、軽く扇子に小膝を叩いて中音の小
謠一節、をりしも要助は座を起つて、こゝに一人を窺ふものは暮れ果てし夏の空の月、たゞ
羨ましげに射入るのみ、

「これ梅、そちに兩親はあるかな」はい、母が一人「む、父は」歿りましてから、ことし
で三年目「何を致して居つた」お恥かしう御坐いますが、大工家業を「大工、はて大工にし
ては、過分の娘を持つたもの」その大工も、只今の母も、實は、義理ある中で御坐いました
「む、して、まことの親ば」身分の低いものでは御坐いましたが、やはり、武家の端で
「や、それで分つた、なるほど、種ぢや、名は何と申したな」どうか、今、しばらくの間
その事は、「何か仔細あると見えるな、きくまい、きくまいが梅、何日か聞かしてくれぬか
な、人にいはれぬ父の來歴を、其方から安心して聞くやうになつて、見たいぞ、は、は、は」

「は、は、は、は、いづれ其うち、お願ひ申してなりと、きいて、いたゞきたう御坐います」きつ
と聞くぞ、今日は此ま、歸るが、梅、忘れるな、たしかに聞くぞ、いはせるぞよ「きつと、
きつと申上げたう御坐いますか、かやうな賤しい家業を致して居ります女」家業は兎も角、
其方の、いや今日は此ま、いふまい、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、
ら、今日はこれで、御免を蒙りたう御坐います」「それが宜からう、あまり長居は却て異なも
の、さア要助を呼んで送らさう、いえ、まだ宵のうちで、幸ひ月も御坐いますから「い、い、い、
月があつても宵のうちでも油断大敵、途中で何者が盗むかも知れない、しかと母の手に渡す
までは、
しませう」それは其善、こゝにこれ大林小三郎といふ奴が、一刀ふりかぶつて斬込むもの、
は、

毒 婦

其九

柳橋の船宿鈴木を人しれず忍ぶ戀路の堀として、お梅その後をりく通ひしが、必ず夜半の頃までには彼の要助が附添うて歸りしかば、母も流石それとは知りながら、今は現在お梅がために浮世の憂節もなく養はるゝ身、まして其人を聞けば思ひの外に歴々の武家衆、朝夕立騒いで水茶屋に出入する賤しい身柄でもなければ、其日々々の家業に差觸るべき筈もなく、いづれ一度は持つべき男、持たすべき娘の身に、生涯あのみまの處女で押通さるゝものでもなしと、始めのうちは唯しらぬ顔して打過ぎしが、いつしか互に語り語られて今は母子の中の力草、ゆうべの残る口説を今朝の母に向うて怨みがましう言へば、母もまた思はず笑うて何處ともなく遁け出すやうになりぬ、

戀は曲物、おもへば情に募り、募れば身にも徹へて、をりく兩國の茶屋も店を閉しつゝ、

不斷の花と唄はれし名物お梅の出ぬ日もあるのみか、此ごろ何とやら氣も心も上の空めいて、今までの萬人一様に迎へし愛敬もなく、動ともすれば憂さげに肩を擧めて物思ふ風情、呼ばれて僅に見返りながら、やうくの的外れし應答さへする體を、かの上汐の勘太、いよくくわつと急ぎ込んで、あるにもあらぬ心の嫉妬、おのれやれ、ぬしは誰ぞと目を敬てゝ規ひぬ、

今までは絶えぬ情を割いて夜半に歸りしかど、重なる逢ふ瀬に思ひの数も積りて、母にも打明けし此ごろは曉の鐘に促がされつゝ、きぬくの餘波惜しげに鴉の聲を怨みながら、立出づる夏の空、まだ往來に人は通はねど夜半にもあらねば只一人、横山町の我家に歸らむとする折しも、ぬつと此方の軒下より現はれたるは上汐の勘太、「おッ、お梅さん、もう夜は明け

毒婦

たげ、狼狽へた夢の見残しか戸惑ひか、どこから何處へ往くのだ」
 南無三寶、はつと思ひしが、遁れぬ瀬戸に落ちては大の男も蹂躪るほどのお梅、ほへと笑う
 て静に振り返りながら、「あれまア、誰かと思ひましたよ、妾よりも貴方こそ今ごろ、どこか
 ら何處へお出でなさいましたの、殿達には夜半より怪しい夜明の一人歩き、どうせ人の知ら
 ない、ほよよよ人には言はれない、憎い花里からの御歸途でせう、ゆうべの痴話でも聞き
 たい事ね、ちつとお寄りなさいましな、御諫言の仕手もないから、妾が目の醒めるやうな濃
 い澁いお茶でも差上げませう」目色も變へず逆に捻って倒まに突き出したる一言、流石の勘
 太おもはず呆れながら、一入さらに嫉妬の火焰むらくくと燃えて歩み寄りぬ、「おい／＼朝ッ
 ばらから何のこつた、自分が喰飽きた前夜の馳走、お裾分け致しますもねエもんだ、かうお
 梅さん、知らねエと思つてるか、蛇の道は蚯蚓と行くめエが、じやの道は蛇だ、面ア生白く

ツても心の黒い和女だから如才もなからうが、實アかう／＼だと明しても大した損はあるめ
 エ、そも／＼誰が兩國で名物お梅の幕を張つたんだ、をかしくもねエ樂屋狂言ばかりする
 と、あの淺黄幕を切つて落すぞ」何だか、さつぱり妾には分りませんが、おい／＼今に人も
 出ませうし、この往來中で、それよりか家か店かへ来てゆつくりと、理由を聞かして下さい
 な」へん、凄まじい、家だの店だのと、誰の家だ、誰の店だ、上汐の勘太ア和女の子分でも
 下馬でもねエぜ、心に何とか思つて言譯の一つ二つもする氣なら、乃公が巢へ来て謝るが宜
 い」謝れと、お言ひなさるの、いえさ用があれば何處へでも行くお梅ですが、あやまりに行
 くほどの家は今のところ、今の身に取つて一軒も御坐いませんわ」よし、さう言やア其決心
 で居るから、あの水茶屋あのみまゝで立派に張通して見ろ、上汐の勘太が黒い目で睨んだぞ」
 「黒い目か白い目か今更ら、そんな怖い事をいはずに、どうかねエ、お手柔かにして下さい

な、これが仇敵同士といふではなし、高が十八の處女を相手になすツちやア却ッてお名前が「何だ、處女だ、おい〜いつまで處女で通ると思ッてるんだ、高が十八も聞いて呆れらア」とにかく後刻ほどねエ」どうでも勝手にしろッ」あれ、さう仰しやらずに、どうか今まで通りの御指圖を願ひます「畜生ぶざげやアがるな、覺えて居ろ」

上汐勘太が戀と慾との兩道を取外せしより、俄に嫉妬と憤怒の目色を現はしつゝ、いつ何時いかなる怨恨を報はむかとは兼ての覺悟、今更ら慌てゝ恐るゝには足らねども、やぶれかぶれの裸體奴に行末ながき此身の運を削られては叶はじと、お梅こゝに思案を定め、一夜逢ふ瀬に小三郎へ對ひつゝ、あの水茶屋を出せし時これ〜の男に五十兩を借りしが災禍の基、此ごろの様子を悟りて俄に嚴しき催促、もし滯らば何と世間へ取沙汰するやら心の知れぬ

ものと、眉を顰めて打語れば小三郎おもはず笑を含みて、そも〜我といふ者あるに、それほど金の苦しむ事やある、第一、さる奴に義理を負うては身の爲めならずと、世にいふ切餅二俵、二十五兩の包みを二個ころりと抛け出しぬ、

もとは川風に散らせし伊勢屋の證文一枚を拾はれしがため、しかも互ひの約束上その金を兩断に分けしかば、預けたりとて半金は固より我物、されば水茶屋を出せし入費も我物にて、さのみ恩も義理もなく猶更ら返すべき筈はなけれど、人しれぬ弱身に崇ッて附け込む厄病神、わづかの金のゆる文句を吐かして大事の前の小事を破るも無念ぞと、その五十兩を例の鬼勝の許へ携へながら、委細は言はず唯あの水茶屋に借入れし金、後の證據に男の手より返してほしと頼めば、上州勝も横手を拍ッて、なるほど念の入れどころと、おのが子分に持たせて勘太が膝へ叩き返しぬ、

動きの取れぬ柵にかけて救ひ手のなき深いところへ落した上、兩國の名物女を我物にせむと思ひし勘太、ぬしは知らねど油斷大敵いつしか餘所の色香にせられしのみか、思ひの外なる五十兩の金、しかも近ごろ遺恨を含む鬼勝の手より叩き返されて、あつと呆れながらも一念いよく曳出す横車、さては鬼勝奴が入らざる喧嘩の買出しか、その色男奴が抛け出せし一物か、いづれにせよ本尊お梅あのみ、無事に置くべきやと、今は戀も慾も打捨て、日夜に積る怨恨の刃を磨ぎぬ、

されど無念や今は一歩おくれたり、乙に搦んで吐き出す文句の緒は五十兩の耳を揃へて返されたるのみか、片脚あけて踏み潰すべき彼女の陣あの水茶屋には必ず鬼勝奴の蔭武者あるに相違なし、唯この上は人しれず忍び逢ふ男の正體を見届けて、まづ其奴から取って占めむと思ひつゝ、日夜八方に眼を配つて腕を擦りぬ、

柳橋の船宿鈴本の仕立にて、夕暮より今夜の月見舟を漕ぎ出せしが、客は知らねど女は慥に名物お梅と、駈け込んで注進するものありしかば、をりしも晩酌の膳に對ひし上汐の勘太、おもはず持てる盃を抛棄て、立上りながら、月は野にも山にも照るものを水の上とは運の果、そつ首たゝいて我手に入りしも同然、どれほど痴話に狂うて夜を更かすとも曉までは浮ぶまい、しらぬが佛のお迎ひ受けて歸り際、うかく漕ぎ戻る河岸は七箇所、それ手を分けて網を張れと自己が子分を配りながら、鈴本ならば此所ぞと思ふところへ其身は用意の一腰うち込んで待ち掛けぬ、

空てる月も次第に傾きて音なき夜露も深く、流るゝ隅田川の水さへ汐合いつしか沈みしころ足輕の小家形舟一艘、鈴本の岸を望んで漕ぎ寄せ來りぬ、

勘太は腹心の子分三人を半町あまりの彼方に遠ざけながら、月を背に浴びて河岸の捨石に腰うちかけつゝ、白銀を砕くが如き水の面を眺めて何気なき體、漕ぎ來る舟は斯くとも知らず櫂を捨て、棹に代へ、はや岸ぢかく棧橋に寄せしかば、まちかねて舟中より飛上つたるは要助、振返りながら中腰に差覗きつゝ、「お梅さん、氣をお付け申してくんなよ、大分に酔つて在らッしやるから」

きくより勘太ぬツと起上りて、宛がら荒鷺の小鳥を覗ふが如く、河岸の上より舟の中を覗んで、おのれ出るが最後、女ならば其まゝ水に蹴落しくれむ、男ならば引摺り上げて踏んでくれむと、隈なき月の光りに透して待ち受くる折しも、あらはれいでしは大林小三郎、ついで名物お梅、その腰の邊りに手をかけて、「お危う御坐いますよ、あれ、お待ち遊はせ、要助さん、お手をお取り申さないかねエ」いや氣遣ひ致すな、大丈夫、酔つても大丈夫、これ要助、手前

こゝへ立戻つて梅の手を取つてやれ」はツと答へて要助そのまゝ又もや舟に乗移れば、小三郎まづ棧橋に足ふみかけて河岸へ上りながら、二歩三歩、行き過ぎむとせし背後より、「青侍、待て、ついでに舟の中の賣女め、奴もろとも出ろッ」

今時の女に好かるゝ腰拔武士、はツと驚いて度を失ふかと思ひの外、怖ろしや聲に隔てを知つたりけむ更に慌てし風情もなく、しづかに振返つて空てる月に打守りながら、「呼止めたは其方が、こりや舟の中そのまゝ、出るなく」いひつゝ立戻つたるを見れば、月に向うて一入白き顔面に物凄く光りし眼中、著流しの落し兩刀、しかも早や大刀の鐔際に左手を添へながら、右手に持てる扇子を逆に取つて何とやら肩を張り腰を据ゑし體、「もし人違ひでは無いか、しかと見い、うろたへて無禮を働かば許さんぞ」素破といはゞ忽ち電光石火、ぬき打にすべき勢ひ見えて寸隙もなし、

をりしも舟の中よりお梅が聲、「あれ、勘太さしぢやないか、をかした事をしなさんな、的が外れて相手が違つてるよ、折角の男振が潰れるよ、ほゝゝゝ」

あまり落付いたる武士の體に、流石の勘太も案に相違して聊か躊躇ひしが、舟の中よりお梅に聲かけられて今は絶體絶命、まづ男を水に組落して得手の水中に働かむと、無言のまゝ躍りかゝつて組付くや否、やつと叫びし聲もろとも、あはれ五體は宙に翻つて自己まづ抛け込まれぬ、

さつと立ちし水音に驚いて、舟の中より飛上りし要助、お梅も我を忘れて其まゝ駈上れば、小三郎ぬつと岸に立つて月代に透し見ながら、「はゝゝゝ脆い奴、しかし刃物三昧せず組付いて來をツたは僥倖な奴、あれゝ泳いで向ふの岸へ渡り居るわ、さて水練は得手と見えるな」お梅は其まゝ物もいはで小三郎の手を取りつゝ、足早に鈴本へ走せ入らむとする折しも、

彼方より驅け來りし三人の男、今の水音は敵と思ひの外の驚愕、たゞ呆れて立つたる體を、小三郎それと知りてお梅を背後に圍ひながら、「其方共も、抛けてほしい奴か」いひつゝ摺寄つて兩眼ぐつと睨めば、三人いよゝ怖れて打守るのみ、「要助、梅を連れて早く往け、あとは慰み半分、はゝゝゝ人間の手鞠を取つて見ようわ」いふや否、すつと戯れに身を沈ませば、三人おもはず飛上つて一散に遁け出しぬ、

其十

水に投げられて水に死すべき奴ならねば、前夜の事より一人さらに怨恨も深く、よしや一方の盾に鬼勝ありとはいひながら、朝夕わが身に添うて守るにもあらず、たとひ生涯の力に彼人ありとはいひながら、晴れて連添ふ妻にもあらず、されば母子たゞ二人このまゝ無事に日を送るが嬉しきとて、日夜あの厄病神に覘はれては安き心もなきのみか、そもゝ伊勢屋の

事より我本性を知りぬいたる奴、無念の餘り喚き立て、世間へ觸れ歩くやら、口惜まぎれに如何なる悪智慧しほりて結びし戀の赤繩を斷たるやら、何としても身に取っては附纏ふ始終の邪魔物、をめぐ、嫉妬怨恨の的に射られて落されむよりは、幸ひ今は家業の水茶屋そのまゝ閉ぢても頼む木の下に雨漏らぬ身、しばし土地を變へ姿を隠して後、機會よくば一足飛の玉の輿、二千石の邸宅に浮世を知らぬ春の夢みたしとぞ思ひ込みぬ、

人しれぬ小料理屋の奥二階に、わざと客なき朝のうちを幸ひ、かの要助と名物お梅が差向うて、四邊を憚り聲を潜めつゝ、中間を隔てし數々の酒肴よりも、心の献立うち聞いて頻りに物語りぬ、

「わざ／＼急ぎのお使ひに来て下さつたのを、こんなところへ無理に引上げて濟みませんが

ね、要助さん、今日は少々、折入ッて、御相談が致したので「いや、こんな無理なら何時でも承知する男、は／＼／＼しかし、かう不意に御馳走して貰つた上、つまり飲まして置いての御相談、薄氣味が悪いね、まさか生膽を呉れといふやうな怖ろしいこつちやアないでせうな」ほ／＼／＼いつも暢氣な事ばかり、實は外でも御坐いませんがね、妾、あの家業が嫌になりましたの、毎日々々朝夕、どこの馬の骨か牛の骨か知れもしない客を相手に、くだらない忙がしい目ばかりしてさ、それも今までのやうに、一日怠れば一日困るといふ時なら格別、ふしぎの御縁で、何の不自由もなく、かう結構に御手當をいたゞいて居るんですからねエ」
 「なるほど、さうだな、今までと違ッて、實のところをいへば、もう世間へ安く顔を曝せない身だよ」だから思ひきツて、廢めて仕舞ひたいのです、そればかりか、そち、過日の月見舟のやうに、とんでもない岡焼の手強い狂氣が現はれますから猶更、ねエ」「そりやア廢め

た方が宜いね、尋常の女と違ッて兩國の名物、これまで落し手が無いで嘸されて居たのさ、
 そこへ急に持手が極ツたと知れた曉は、どうせ天下太平で治まらないよ、しかし要助に相談
 して廢めたとなツちやア少々困りますね、ともかく伺ツた上にした方が確實だらう、伺へば
 すぐ廢めて仕舞へと仰しやるに極ツてるがね、念のためだ』それで伺ツた上に致しませ
 う、とここで要助さん、あの水茶屋を廢める時には、外の十一軒から株のお金が十五兩ほど
 來ますから、それは貴方に、お上げ申しますよ』えッ、十五兩、あの十五兩を下さるのか、
 そりやア有難い、ぢやアお梅さん、いッそ伺はないで今日すぐ廢めたら如何だね、伺ツたと
 ころが廢めると仰しやるは必定、また客足の淋しい外の茶屋と違ッて、今まで十二軒の繁昌を
 一人で背負ッて立ッた名物お梅が急に廢めるんだから、談判の仕様に依ッて十五兩のところ
 を二十兩ぐらゐになりさうなもんだね』ほ』まア要助さんの現金な事、あまり正直す

ぎて御挨拶に困りますわ』は』ムムム、とここで相談といふなア、それだけの事ですかね』い
 いえ、そればかりなら、別に御無理を願ッて、こゝまで來ていた』かないでも宜いんですが、
 實は、店を閉めると直ぐ、どツか人に知れないところへ、轉宅たいんですの』なるほど、急
 に店を閉したら、猶更ら人が詮議立ッて面倒だらう』母子た』二人ですから、どんな小さな
 家でも構ひませんが、ならう事なら、をりく殿様が入らしッても、さのみ差障のないやう
 な家をね、第一あ』して船宿なぞへ、しけくお越になッて居ては、御身分がら、もし妙な
 間違のあツた時、また御心配のある筈は御坐いますまいが、お入用も、なかく重りますか
 らねエ』や、そろく世帯じみて來たね、しかし感心だ、行届いたもんだ』それを、妾から
 申上げて宜いやうなもんですが、一切、そんな差出がましいことは、つねく母から固く
 止められて居りますから、要助さん、どうか貴方の御考案として、いつか御機嫌の宜しい時

に、願ひたいので、ねエ」委細承知、つまり願はれるンでもない、手柄を譲って貰ふやうな
 もんだ、はムムム」妾は、こんな賤しい不束な性質ですから、いつ何時、思召に叶はな
 なるかも知れませんが、要助さん、貴方だけは末ながく、妹のやうに思つて下さいよ、妾も
 同胞はなし、義理ある母一人で「こりやア痛み入った事だね、この要助が、お梅さんの兄た
 ア少々お荷物が重すぎて満足に歩けませんぜ」あるけても歩けなくつても、是非お願ひ申し
 ますよ、最初の橋渡し、いは月下水人、貴方ですから、また泣きの涙で秋の扇と捨てられた
 時も、どうせ貴方の御厄介もの「はムムムその邊の心配なら御無用々々々、たとひ天地が倒
 まになるとも、決して、それどころか今に玉の輿のお迎ひが行くかも知れないくらゐだ、
 その時はお梅さん、これ要助、履物を直してたも、はッ、これ要助、供して來、はッ、萬
 事この邊は當然ですが、あの要助は嫌な奴など云つて追出しちやア恨みますぜ、はムムム」

「ほムムム屋根の上と床の下、そんな事は、全く夢にも思ひませんが、もし萬々一、もし、
 お邸宅の御都合さへ、さして、お構ひ御坐いませねば、せめて一度、お小姓がはりの御奉公
 がして見たう御坐いますよ、とれほど、お情を蒙つても、つね平生お別れ申して居ては、
 それより朝夕お傍に居て、ねエ要助さん「そりやアお梅さん、むづかしい事でもないが、内
 々は兎も角、表面だけは、まづ、お小間使といふ譯で、しかし、危険なお小間使だな、
 もし奥様が外からでも來れば忽ち大騒動、いよく、お家の珍事出來で、この要助なンさア一
 番に遣られる口だね、奥様の方からは元來あの者が最初を取持ったのだと言つて憎まれ、また
 此方からは元の素性も萬事の内幕も知つて居る奴、生け置いては何かの妨害といふやうな譯
 で、こりやア雙方どっちへ廻つても助かないぜ、はムムム今のうち水茶屋の株十五兩
 貰つて通出さうかね」ほムムムまるで芝居にありさうですねエ」まづ今日の狂言は、これ

ツきりて打出さうかな』もう、お歸りなさいますの、それでは今お願ひ申した事は、どうか宜しう』「おツと承知、呑込過ぎて忘れないうち、如才なく伺ッて都合の宜いやうにするから」

鐘一つ賣れぬ日はなしといふ江戸の繁昌も、こゝに半を奪はるゝ兩國の賑ひ、その兩國に不斷の花といはれて色香も深き名物お梅、中には逆も叶はぬ戀を捨て、目を飲つゝ、萬人に思ひを惱ませし身の末いかならむ、男冥利に盡き果て、昔も今も小町が成れの果、どうせ小唄に唄はるゝ浮世の露の語り草、さても面白い見物ぢやとて日夜に立騒ぎし其水茶屋が音もなく消え果て、俄に店の戸を閉固めしかば、あツと呆れて一夜の嵐に落花狼藉、香さへ残らず散り行きし行方いづこと口惜がりて、何者が擱んで退いた、天狗か魔物か雷か、よもや人間業ではあるまじとぞ騒ぎ立てぬ、

其十一

お梅母子が打連れて近き横町の錢湯に行きしかと思ふばかり、たゞ何氣なき常著のまゝに立出でし後より、かの要助か入り來りて俄に世帯を取片付けつゝ、それ〴〵近處合壁へも分に過ぎたる音物を配り、仔細あツて此まゝ歸らぬ二人の母子と挨拶せしかば、いづれも驚きながら風聞とり〴〵、要助の風體を見て必定いづれかの邸宅へ引取られしとは知れど、さて行方知れぬ玉の輿、子を生むなら女ちやくと喚き立てぬ、

心は折るに委さず氣は踏まれねど、今までは主も定めぬ路傍の花、朝夕たえまなき浮世に面を曝して知る知らぬ萬人の戀に慕はれしが、きのふ今日は唯ひとりの人に月花と眺められて、ふかき色香を包まれながら、人しれず情の露を含んで媚びぬ、

江戸随一の大河を我物として上汐の勘太ともいはれし男が、ことし十八の小女郎に素丁稚の如く追使はれ追廻されて、揚句の果に嚙んで吐出されし無念心外、もはや戀も慾も捨て、かゝつて待受けし月見舟、痛いか痒いか怨恨の荒療治してくれむとせしに、忍ぶ情の男といふ奴、兩刀さしても尋常の青二歳と思ひの外、こいつも外見によらぬ白むく鐵火、忽ち取つて抛けられ不覺の上の不覺を重ねしかど、幸ひ得手の水に遁れし曉、おのれ此上は彼女の根を掘り根性骨の底を叩いてやらむと覘ひし甲斐もなく、兩國の水茶屋も横山町の家も一時に閉ぢて行かされずとなりしかば、さすがの勘太おもはず大息ついて舌を巻きぬ、されど四里四方の江戸市中、いづこの隅に隠るゝとも彼ほどの女、人の目に付き風聞に立たぬ筈なければ、結句この脚下にうろついて我鼻頭の曲らむよりは、幸ひ鬼勝奴が手の届かぬ

ところ、縁も由縁もない繩張外に見付け出して、二度と再び世に出られぬまでの返報、しやッ面を蹂躪つて生きながら不具にしてくれむ、もしや此こと叶はずば上汐の勘太ことし三十一、頭髮剃落して坊主にならむと叫びつゝ、宛がら親の敵を覘ふが如く血眼になつて八方を探し廻りぬ、

立てられて男を磨く上州勝、敵に對うて二の足ふまぬ鬼勝、兩腕組んで物の分別する時は尋常の勝藏とまで囃されて、善にも悪にも浮世の兩道かけて踏み抜いたる剛の者ながら、ことし十八の花の姿のお梅には流石に小首を捻つて驚かされぬ、世間なみくの目からは、夜ふけし我家の圃に行くさへ怖るゝほどの顔貌、男に物いはれて胸の轟き止まぬ芳紀ながら、この上州勝を退かぬ男と見込んで始めて來りし時、はや本所の伊

勢屋が事より上汐の勘太を逆に捻つて手鞠に取りし一切、さらりと打明けて顔色を變へざるのみか、我をも時の道具に使うて暴風の盾にせむとの一物、さては此女、諺にいふ小腕の大、胸、面白の腹黒、みかけ泣かせの裏刃、いばら牡丹の花の色香と思ひし處女の今でさへこれほどの女、こゝ四五五年の後には如何なる檜舞臺を構へて浮世の狂言を仕組むかと、戀より外の凄いとこゝろに惚れ込んだる鬼勝、幸ひ子はなし先方に父なし、ならば父子の縁を結んで今より百層倍の腕を添へむと思ひしに、兩國の水茶屋も横山町も一時に閉ぢて行方しれずと聞きし時、これはまた格別の無念心外、宛がら掌中の玉を取られし心地して口惜がりぬ、されど元來あれほどの女、いはゞ敵を防いで味方となりし此鬼勝を此まゝ捨て去るべき筈なし、いづれ一言そのうちに音信あらむと思ひし折しも、姿を隠せしより五日目の夜、門口に一挺の駕を乗り捨て入り來りしは名物お梅、さてこそと膝を叩いて我鼻を蠢かしぬ、

人なき奥の一室に伴へば、なるほど世間の男が魂魄脱殻となつて騒ぎしも道理、今更ながら戀なき目にも覺むるばかりの容色、さらに一入の艶を含んで膝を進めつゝ、縁も由縁もない妾を、あれほど厚いお世話、お力になつて下さいました貴方に一言の挨拶もせず、あのまゝ急に家も店も閉めて仕舞つて、風のやうに消えましたのも、實はね、いろいろ理由のある事で御坐いました。はゝゝゝ理由も理由、一筋や二筋の理由で、さうなるお梅さんちやアあるめエが、まア過去つた事は宜いとして、今どこに居なさるね。はい、これも少々、人には憚りますが、貴方だけに、只今は麴町の平河町に、あの天神様の横手に、やはり母と二人で。む、随分、江戸市中ちやア高飛だつたね、しかし、おツ母さんと二人ぎりちやアあるめエ、近ごろ出來た金より生命より大事な人も居る筈だが、いえさ、世間の奴等や現在あの上汐なごと違つて、焼く方の役廻りでねエから安心して明かしなせエ、いつか店で勘太が落合つた

時、生涯を男嫌ひで通してほしいと言った事は言ったが、ありやア時の意氣張から出た言葉で、實ア無理な注文さ、その美色で其芳紀だもの、どうせ一人は持つが當然さ、しかし、名物お梅さんの凄目鏡に叶った男が見てエよ、まさか尋常の端た野郎ぢやあるめエ、は、は、は、なぜ今夜、一所に連れて來なさらねエンだ、お親密になつて置く筈だにさ、あれ、まさう何から何まで、眞正面から打込まれては、ほ、ほ、ほ、御挨拶に困ります、實は、又かと、うるさく思召しませうが、それは就いて、この梅が是非、貴方へ折入つて、今夜ア母にも、その人にも隠して伺ひましたので、おツ母さんは兎も角、可愛い其人にまで隠れて來たとア、全體ドンな事で、かう申しては何だか、妙に、呵しいやうで御坐いますがね、實は其、その人の身分から、お話し致さないと分らない事で、おツと、お梅さん、恍惚を抜きにして萬事あつさり頼むよ、その人の事をいふも宜いが、初戀の大上氣で、あんまり委しう

聞かされ過ぎちやア、いくら鬼勝だつて少しやア妬げるからね、は、は、は、は、は、は、えさ、そんな上の空で伺つたのぢやア御坐いませンの、實は妾の身の、生涯、行末の事に就いて、しんみりと沈んだ談話、ぢやア本筋の大眞面目だね、して其人といふなア全體、實はねエ旗本で、二千石取の御次男、ことが二十四、親御は守名のある方で、お兄様は公方様のお側で、今のところ、まだ部屋住では御坐いますがね、お、それ、いつか兩國の橋の上で、間盜を五人、一時に斬つたといふ噂が御坐いましたらう、その方ですよ、あの時、妾の店へ血刀を提げたまゝで駈込んで入らしてね、及ばすながら、お世話申したのが縁の端で、それからの事、む、あの橋の上で、あの時の侍か、現場は知らなかつたが、うちの野郎が見て來たつて、その手際に驚いた談話を聞いたが、む、さうかい、や、流石お梅さんだ、大變な男を持つたもんだ、しかも俳優のやうな美しい男だといふぢやアねエか、猫でもねエが、よく

取ッた、よく咬へた、世間中を喚き歩いて自慢しても宜いくらるだ、なるほど上杉の勘太ぢやア飛ンでも跳ねても齒が立たねエ筈だ、まるで物が違ッてるからよ、は、は、は、は、しかし今申す通りで、妾とは根から身分が相違して居ますから、をりく、忍んで入らッしやるンですがね、妾も不束ながら縁あッて折角かうなッた上は、いつまで世間を憚る、貴方の身で居たくなし、ならう事ならねエ、どうかして、お邸宅の方へ這入りたいと思ひますのさ、む、なるほど、氏がなくッても玉の輿、腕で乗込まうといふんだな、いえ、さういふと何だか、お家騒動を惹起す悪い御部屋のやうに聞えますがね、妾のやうな浅い女に、そんな儲ろしい深い企謀のあらう筈はなし、また、これが何萬石といふお大名の家でもなしさ、現在まだ親御が世を取ッて在らッしやるのみか、お兄様もあるンですから、よし思ッたッて逆、無効ですがね、それよりも外に少々、まづ平ッたく言へば、は、は、は、は、離れて居たくないといふくらる

の事ですよ、しかし、それに就いて貴方へ是非、お願ひが御坐いましてね、』む、乗込んで玉の輿でもねエ外に、只この邸宅へ這入りてエといふ、それに就いて、この鬼勝へ、全體、どんなこッたね、ちと談話の調子が分らないやうで變だね、辻褄がさ、』きいて下さいませうね、貴方が、ウンとさへ一言、いッて下さりやア、妾も思ひきッて、やります決心、その代り、かう申しちやアお氣に觸るかも知れませんが、この梅が、きッつと貴方を江戸一番の男に致しますから』

上州勝おもはず腕を組んで眉を寄せつゝ暫し考へしが、何をか悟りけむ、我みづから我に首肯いて膝を進めつゝ、今更にお梅の顔じつと見詰めながら、『お梅さん、何だね、つまらねエ、二度も繰返すにやア及ばねエこッた、實ア鬼勝の氣を引いて目色を見るため、心の裏表を引ッくり返して言ッたんだらう、は、は、は、は、つまり名物お梅が家の次男を抱いて二千石を取るか

取損ねるか、この鬼勝が江戸一番の男になるかならねエか、互ひに陰陽なく助け合つて一狂言を仕組まうといふんだね、なるほど面白い、もう乃公も四十の上を三年も越して身の素性がら今日までの成立を言やア、随分この首の四個五個あつても足らねエ男だ、さんざ野郎の膽の太エ奴にも當つて来て喧嘩三昧にも飽きた時だから、お梅さんのやうな凄いな花を娘分にして氣の變つて邸宅を相手にして見ようかな『怖いほど妾の胸裡が見えますことねエ』別に見える目でもねエが、心の裏の前口上があつて、其上この鬼勝を江戸一番の男にすると言つた一言で、はゝアと氣が付いたのさ、ぢやア現在その人の親御といふなア、公義の重い役人だな『實はね、大林甲斐守といつて』むゝそりやア當時有名の町奉行だ、なるほど、いよゝゝ分つて来た、兄を蹴落して次男の色男を世に立てた上、親譲りの役柄でもねエが、その町奉行まで取らうといふんだね『夢を眞實にしたいのですよ』いや、随分、事と品に依つちやア

腕次第で夢も眞實になるさ、よし、乗つた、しつかり遣なせエ、及ばすながら、この鬼勝が生命がけて前立にも脇立にも後立にもなるから『ほゝゝゝもし萬一仕損じた暁は、あの人を抱下して侍を止めさした上、また別に工夫も御坐いますから』それほどの凄く度胸があつても、戀は別だに見えるね、お梅さん、打明けたところ全く其人に惚込んだのだね、はゝはゝ、首尾よく遣れば猶更ら、もし出来損つても嚙りついて放さねエたア驚いたよ、しかし本人の色男様は、まだ其氣になるめエ』なるどころですか、親孝行で兄おもひといふ評判を取つてくるらるるですが、こゝ半歳か一年の間には、きつと妾が其氣に見せませから、なアに貴方、木でなし石でなし心の動く人間ですもの『や、出来た、出来た、その勢ぢやア出来た、これが毛脛の大の男が力業なら覺束ねエが、その芳紀で其うつくしい顔で、その度胸と手腕を振舞はされちやア堪らねエよ、はゝゝゝ』

百年の苦樂は男に倚る女の多きか、百年の苦樂は女に依る男の多きか、花もの言はざれど人を迷はすか、人もの言へど花に迷ふか、戀は慾に伴ふか、慾は戀に伴ふか、浮世は夢の如く夢ならざる間に事の順逆を宿して善といひ惡といふ、その善惡さへ思へば露の生命の西東、いづこに向うて誰にか問はむ誰にか問はむ、

毒 婦後編

其一

親兄弟の行方を知らぬ顔して鼻唄うたふ奴はあれど、金と女の行方を其まゝには捨て、得置かぬ世の淺ましき、縁も由縁もなき餘所の花さへ今を盛りの姿を隠せば、あつと驚いて我身の膽魂を取失うたるが如く血眼になつて立騒ぐ人心、ましてこれは江戸繁昌の隨一、その兩國の不斷の色香として萬人の思ひを惱ませ戀の淡と唄はれし名物お梅が、一時に家も店も閉ぢて闇の夜の鐵砲玉、飛んで行きし方角さへ更に分らずなりしかば、朝夕うき身を窺せし色餓鬼の亡者共いづれも無念の眼を見張りながら、さて何處を睨んで宜いやらのもなき怨恨の空に、あはうと啼いて渡る鴉の聲、畜生め、ふざきやアがるな、

鐵も石も柔らぐといふ年は十八、おツとりとして騒がぬ中に滾るゝ愛敬を含み、びんとして強ねたところに案外の世辭を浮べて、しかも物數いはぬ自然の殺し文句、おのづから備はる男の生命取、小股きりゝと切り上りて手足の指頭まで上反に薄紅の色づいたる風情、やア堪らぬとは全くの是沙汰、外へ持つて行かれぬ言葉の鏝、うッて叩いて動かぬ管の名物、あれほどの女を、音もなく引抜いて突ツ走ツた奴そもくゝいかなる男ぞ、せめての腹癒せに唯一目その面を見て胸に下らぬ溜飲の青痰をひツかけてやりたいと騒けども、さてその男の氏も素性も名さへ影さへ知るものなければ、いよくあとの祭禮の轉手古舞、これまで上げし賽銭の烏居の數々うらめしいとて、今は本尊なしの空宮に痾癩玉を叩きつけて口惜がりぬ、

ふしぎや一夜に飛びし梅の花、いづこと思ひの外、おもひもよらぬ平河町の天神横町の主を慕うて色香を含むとは、ともに縁ある事ながら、縁なき萬人いたづらに戀を失うて怨める中にも、かの上汐の勘太は其後さらに一入の無念をかさねて親の仇敵、兄弟の仇敵、友達恩義の仇敵を見通すとも、ことし三十、の男も男、うてば響くと唄はれて江戸隨一の大川を我物とせる伊達男が、やうく十八の小女郎に追使はれ追廻されし果は嚙んで吐出されし怨恨の返報、おのれあのみゝ無事に置くべきや、しかも彼女のみか、しのぶ戀路の片相手、その青侍にも寢刃の一物、くれてやらずば平生の我この腕に申譯ないとして覗ひ廻りぬ、

こゝにまた上州勝は善にも悪にも浮世の兩道かけて踏抜いたる男、人しれぬ心のうちに思はず四十年來の笑を含んで、このごろの長き秋の夜なく、竊に寐覺勝の枕を欬てつゝ、煙草盆引

寄せて天井に吹上ぐる煙の行方に工夫を凝し、しゆつと叩く灰吹の音に思案を固めながら、今この太平の世に刃物三昧は一人と一人、取れば取らるゝ生命の引替、よしや男を磨いて此上さらに百人二百人の子分を増せばとて、我ひとり男ならねば四里四方の間に互ひに腕を争うて年中たえぬ日夜の縄張喧嘩、それさへ仕飽きて更に何の面白うもない折も折から、ほとと笑うて二千石を笑渦の露に落さむとする花の顔、幸ひ子のなき我娘分にして内と外との裏表より疊みあけたる上、鬢に白髪は交るとも男一代、くわつと江戸の八百八町に鳴らしてくれむ、よしや仕損じても浮世の年貢を借過ぎて惜からぬ生命、あれをあのまゝ尋常の女にしても鬼勝の娘には恥かしからぬ女、父子もろとも地獄の上の一足飛び、玉の輿に乗るか乗らぬか、江戸一番の男になるかならぬか、その幕開けの血祭りには幸ひ上汐の勘太め、こゝまで深い心の底は知らずとも、きけば伊勢屋の事より水茶屋を出せし樂屋の狂言人足となりし

奴、第一が月見舟を待受けて抛けられながらも二千石の正體まで見届けたる奴、まして自己が戀と慾との外れし怨恨に無念の白刃を磨いで覘ふとやら、どの道よりも我等がための厄病神、機會もあらば遁れぬ瀬戸際に追詰めて蹴落した上、まづ此奴を事の手初めに引導わたしてくれむとぞ思ひぬ、

この隅田川の永代より吾妻橋の間を我物として、家根舟猪牙舟網舟一切の冥加錢を、居ながら上汐の勘太といはるゝ男なれど、水には一盛りの夏も過ぎ月に名所の賑はひも過ぎて、いつしか筑波おろしの川風寒く、木枯の音さへ身に染む頃は懐中もまた秋の暮、内證の淋しきに連れて何か事あれかしと思ふ例年の冬も、ことは名物お梅を覘うて嫉妬の怨恨の一念に腸を燃しつゝ、幸ひ今より來春にかけて身は閑暇なり、おのれ此間に見付出して寒中の手料理

癒は宜いが、あとの役に立たねエ大疵ぢやア困るから酷く痛めねエやうに頼むぜ、また折角この五人が骨を折って引捕へて来た上で、なるほど今更ら面を見ちやア手が出ねエなぞと捨てた煩惱を再發しても無効だ、仲間の念佛講にやア入れねエぜ』は、ムム、腐ッても勘太ア男だ、煮て喰はうが焼いて喰はうが見向もしねエその代り、巢殻を叩き賣った酒は飲むぞよ』どわか酒だけで済してエもんだよ、ねエおい、一人でも講中が殖えちやア互に氣乗が薄くならアね』は、ムム、ムム、すきな熱を吹く奴等だ、萬事まア珠玉を擲んでからにしろ、空手で文句を竝べたッて晝に描いた盃だ、味も無きやア酔ひもしねエよ、しかし五人とも油断はならねエ、ぜ、阿魔が首ッたけ嚙りついてる青侍、ありやア尋常の二本差と違ッて随分、おもひの外に小手の利く奴だから』小手が利いても向脛が働いても、寸隙を覘ッて打込む分にやア此方もんだ、いかに跳ねても蹴ッても四本の手足を一本づつ荷いだ上に、まだ一人が残る筈の五

人がかりだ、しかもこの夏の月見舟で睨んで置いた風體、大名の勤番者ぢやアなし藏前蟲の御家人ぢやアなし、大方、旗本の次男か三男と射抜いた金的、よもや外れめエから邸宅の見當も付いて居らア、それに續いて探りやア阿魔の居所も、まさか雲を掴むやうぢやア無からうさ、兎も角も此方は五人で引受けたから、あの鬼勝を』おツと皆までいふな、男と男の一疋取替、いつでも何處でも時と場所はねエ、出逢ふが最後、上州勝は勘太の手のうちだ』六人もろとも車坐となッて酒酌み交しながら、始めは額を鳩め聲を潜めて語りしが、いつしか酔うて圖に乗り勢ひに任せつゝ、果は四邊も憚らず自己が膝拍子を打ッて罵り騒ぐ折しも、襖を隔てし彼方の一室より天井も墜ちむばかりの高笑ひ、『はッ、はッ、はッ、ムム、ムム、飢饉年の亡者野郎め、たま〜の料理屋酒に、喰ひ酔ッて腹の蟲が狂った故か、ろくでもねエ上ッ調子に人間竝の聲を出しやアがる、うるせエ〜、耳觸りだ癩觸りだ、第一この下物に酸の

氣が差して美味くねエ酒の味まで違ッて來たア』
朝の鴉の啼聲、夜半の犬の遠吠さへ、敵手次第の無事では置かぬ六人、くわツと怒ッて物を
もいはず隔ての襖を蹴開けば、上州勝たゞ一人、大胡坐の左に胴金巻の脇差を引付けながら、
手酌の盃とりあけて動きもやらず、立ッたる六人の面體じろりと睨んで冷かなる笑もろとも
眉も寄せぬ、『やい〜、うぬ等ア全體、どこの温氣に連れて湧いて出た蟲だ、たとひ一時でも
半時でも、この一室ア乃公といふ客が借切ッた城廓だぞよ、うろ〜、狼狽へて這込んで見る、
は〜、は〜、しかし萬一、それでも人間並と思ふなら、其中の勘太とやらいふ奴たゞ一人こゝ
まで出ろ、男と男の一疋取替、いつでも何處でも出逢ふが最後と吐した今の一言、さアその相
手の鬼勝だ上州勝だ、あとの五人の奴等ア策でも持ッて來て粉に散る骨の屑を拾ッてやれ、但
しまた、牛は牛づれ共倒れになる覺悟なら、遠慮はねエ、會釋も入らねエこッた、六人一度にか

かッて來い、誰の事かア知らねエが、手足四本に取ッついても一人は残る筈と吐したが六人
ぢやア二人も残る筈だ、その鬨が敵味方の境目、乃公から出ようか、うぬ等から落込むか、
さア返答しろッ』いひつゝ持てる盃ぐツと飲乾して片膝を立てながら、片手に脇差の鍔元を
寛けて待ち構へたる體、うまれついでの大兵に寸隙もなく、しかも今年四十二の曉まで幾人
の血糊を浴びて腕に覺えの面魂、ぶツと吐いたる酒氣に一入の度胸を据ゑて物凄し、
五人おもはず猛勢に吞まれて互ひに顔を見合す中より、流石は上汐の勘太たゞ一人、ヤツと
いはゞ其まゝ起つべき用意の雙脛を隔ての鬨際に詰寄せて、をりしも炎々と盛上げたる眞鍮
の大火鉢を手許に引よせながら、『むゝ勝か、噂をすれば影とやら、いつの間に這入り込んで居
たか知らねエが、ふわ〜と人魂のやうに音もなく出たり隠れたりするにやア妙を得た奴だ、
なるほど、あの小女郎が一夜のうちに消えて無くなッた手際も讀めた、ところで今この五人

も引摺り出すぞよ』出るか出ねエか後のこつた、前口上は俵置いて随分まア駄骨を折ッて見ろ』は、ムムムムどこまで口の減らねエ奴だ、今に後悔するな』念に及ばねエ、こゝは互の腕づくだ、かくし手と探し手の腕み合ひ、といひてエが、まづ其前に汝が生命はなからうよ、落ちる地獄の釜の底でも探すが宜い』『底といやア蓋を取られて驚くな、しツかり四方から釘を打ッて叩いて用心しろ』『まだ互の鎧を削る御縁が薄いといふもンか、さツと赤い一雨、いづも降るやうで降らねエ空の雲脚だ、これで二度目の相引か』『佛の面も三度の諺だ、さツと降出した曉は逃げ込む軒下も隙も無からうぜ、今から笠の臺の緒を占めて吹飛ばされねエ覺悟しろ』『まさか覺悟するほどの敵でもねエさ、は、ムムムムしかし勘太、いつまで互に無事な面ア見合ッて文句ばかり並べて居たッて埒が明かねエ、さらば一番面倒なしに日を定めて』『おツと望むところだ、十日か半月か一月か』『いや、互の勝負は今が今でも附くにしろ、

事の源因となつた名物お梅、うぬが爲には無念の塊物だ、それを其ま、探し出す日數もねエ間に死ンぢやア氣の毒だ、いかな水功者でも浮ばれめエから、まづ五人の奴等が四里四方を廻る間の日取、幸ひ來春まで身體の閑暇と吐した一言で今日から三月だ、來年の二月までを日限と定める、敵でも何でも情を叩いて踏込む鬼勝ぢやアねエ』『なるほど、まだ五體の片隅に男氣の残つた言分が殊勝だ、ぢやア來年の二月までを互ひの運命、その間に女郎を探し出すか出さねエか、その曉に打つか打たるゝか』『お、よし、それでこそ其方に心が残るめエから、乃公に取ッても打込む鋒鈍に思ひきッて容赦がねエ、とかく男の張合に疊りがあッちやア互の名折れた、は、ムムムム勘太、まア其間ア身を大切にしろ』『うぬも随分、養生して、煩はねエやうにしろ、いはゞ雙方、あづかり物だ』『む、こりやア今日中の秀句だ、互に預り物の生命たア能く言ッた』『よくも悪くも來春の二月まで、張り詰めた氷の解けるが相

圖だ、鬼勝、いゝか「おツと、よし、たしかに承知だ」

其二

うき世を忍ぶ身ならねど、江戸繁昌の随一といふ兩國の水茶屋に朝夕の客を迎へつゝ、しかも不斷の色香に名物お梅と唄はれし萬人の戀を振捨て、音もなく一夜のうちに花の姿を隠せしかば、何とやら影を追はるゝ心地して安からぬのみか、中にも上汐の勘太が嫉妬と怨恨の一念を身に覚えある事、まして戀は戀なれど此まゝいつまで日蔭の露を宿とする心ならねば、いづれにしても今のうち人に顔みられて親しう物いはるゝは身の爲ならずと、深くも行末を思つて我から羽翼を縮めし籠の鳥、音さへ漏さず餘所を憚れば、人しれず通ふ男の情いよく増して、いつしか魂魄を奪はれつゝ、生命ものは、世にまたなき名花一輪、戸の隙間も風にも當てじと思ひ込みぬ、

神社佛閣と物見遊山の差別なき人心、されば平河町の天神も朝夕たえまなき雜沓に包まれて、いつまでの隠れ家ならねど浮世の裏の細小路、壁一重の横町は却て人の氣付かぬのみか、もの調ふる世帯の便宜もよし女ばかりの身の用心もよし、さては番町より忍ぶ情の通路にも遠からずと、もとは社家の隠居が住みしといふ家を借受けて、お梅母子の外には下女たゞ一人、幸ひ庭前の樹立ふかく廣ければ母屋に離れて茶室めいたる六疊二室を新たに建てつゝ、をりく人しれぬ樹間を漏れ来る燈火の影は、これぞかの大林小三郎が忍び來て、戀の手枕に夢結ぶ春の塙なりける、

木枯しの音たかく薨の霜を吹き拂うて、空には冴え渡る師走の月いと物凄く、まだ夜は更けねども流石に人の通路も絶え果てつゝ、門守る犬の遠吠さへ聲を含み、ながす按摩の笛も疎

りて身に染み渡るころ、天神横町のお梅が門の戸を引開けて、ぬつと出てたる大男そのまゝ立去る影を、此方より透し見ながら軒傳ひに入れ違うて、今しも閉てし戸を軽く叩けば、かの大男また振り返りて歩を止め、じろりと見詰むる體、家内には母親の聲として、「何か、お忘れ物で御坐いますの、いや今、出た人と違つて要助だ、あれ、お梅や、要助さんが、聲もろともお梅は戸口に來りて迎へ入れながら、「おや要助さん、今ごろ貴方、お一人、何、お伴して來たんだがね、ちよいと天神様へ御參詣の間に先觸だ、しかし今、こゝから出たア全體、誰だね」「あれで御坐いますか、あれはね、私の伯父で、久しく逢ひませんでしたが、勝藏と申しますもの」「むゝさうか、そりやア兎も角お迎ひに出るから」「いひつゝ取つて返して走せ出づれば、今の大男いつしか去りて影もなく、主の小三郎たゞ一人、わざと目立たぬ風體に面を頭巾もて深く包めど、空照る月に大小の鏡きらりと光りぬ、

要助が戸外へ走せ出づるや否、さらに心の寸隙もなき名物お梅、片手に髪を搔上げながら、そのまゝ門口に立出でて迎ふれば、小三郎おもはず頭巾の中より微笑を漏しぬ、「むゝ梅、迎ひに出たか、わけて今夜は寒い、要助、もう歸つて宜いぞ」「いひつゝ年久しく召使ふ我家來ながら、人しれず忍ぶ戀路と思へばこそ、懷中より紙に捻りし小粒の露を渡しぬ、「これで暖まつて歸れ、明朝は迎ひには及ばん、しかし例の通り、脱殻の部屋番を頼むぞ、はゝゝゝゝ」「恐れ入ります、おやアお梅さん、此ごろ少々お風を召して在らつしやるから、あまり御酒を差上げないやう、萬事お願ひ申しますよ」「はい、御苦勞さまよ」

母親は母屋の裏口まで送りて、下女は臺所の片隅より差覗くのみ、お梅は奥の庭傳ひに手を取りて戀の唄に伴ひつゝ、誰に習はねど自然に備はる男殺しの本性、兩國の花といはれて朝夕萬人の客を手鞠に取りし不思議の愛敬を、今は唯一人の男に集めながら、氣も心も溶けて

流るゝばかりに行届いたる色香の振舞、これが今年やうく十八、しかも此ごろまでの處女
かと思へば、うまれついたる天生の魔力、元來の生命取、さても怖ろし物凄し、

「今夜は、わけてお寒う御坐いますに、よくまア雪も氷も熱くなつて通ふ身の空といふ事
があるから、はゝゝゝゝ、霜ぐらゐるは何でもない、みちくく白く冴えた月に照り渡る屋根の薄
化粧を見ても、梅、早く其方の顔が見たいと思つてな、我しらず、はゝゝゝ、足の運びが浮いて
小石に躓く體、見せてやりたい、見てほしい」「あれまア」「いや、嘘でない、五人十人の武
藝者が一時に斬込んでも更に驚かない男が、戀に追はれて思はず石に躓き、よろくと倒れか
かつて軒下の天水桶に組付かうと致したところ、我ながら不覺千萬、面目次第もない見苦し
さ、伴に連れた要助の手前も恥かしかつたぞ、しかし大林小三郎ともいはるゝ武士を誰が斯
様にした、何者の仕業か、梅、返答せんか、はゝゝゝゝ」「ほゝゝゝ、何と、御挨拶を申上げ

まして宜しいやら、申譯があるまい、あつて宜いものか、戀は古今の曲物で、いかな勇
士も叶はンといふ事を今、始めて我身に知つた、が梅、其方の目から見ると、男といふものは、
さてく痴けた奴と思ふだらうな、はゝゝゝゝ」「あれ、勿體ない事を、縁なればこそ、わけて
ふしぎの御縁あればこそ、妾風情が斯やうに、それも、お邸宅へ御奉公申上げて、お末の端
でも勤めます身ならば格別、あのやうな賤しい水茶屋家業を致しました女が、俄に世間
しらすの安樂な御手當を戴いて、此ごろの寒い風にも當らず、かやうに居ながらお忍びを待
ちましては、却て物の冥加が怖ろしいかと存じます」「むゝ其方は、かうして居るより、邸宅
へ來たいといふのかな、とかく武家邸宅は窮屈千萬だぞ」「かやうな下種に育ちました不束な
女、お邸宅へ上りましたところで、何の御用に立つ筈は御坐いませんが、たと行末を長く、
お傍で御奉公申上げたいばかり、ものには萬事それぐの釣合似寄といふ事を、かねぐ承

して居ります時分、家業が家業で御坐いますから朝夕、うるさく大勢の客が出入いたしましたし
 て、ほゝゝゝ妾のやうな女を、いろ／＼と、その中に一人、わけて、執念深く附纏ひますも
 のが『こりや待て、それが其方の初戀か、きゝたくないぞ梅』あれ、よくお聞き遊ばさない
 で、憎らしい事を、戀も色も妾には生れてから死ぬまで唯お一人の外、いえ／＼存じませ
 いくら何と御意遊ばしても、その方の御名前は暫く申上げられませんから、ほゝゝゝ、と
 ころで執念深く附纏ひました其男が、世間普通、たゞの男でもあれば、また謝絶の仕様も
 身の通れやうも御坐いますし、さのみ怖れて逃げ隠れ致さずとも濟みませうが、何分あの隅
 田川で永代から吾妻橋までの間を我物顔に上汐の勘太と申して、家形舟猪牙舟網舟なぞ一切
 の冥加錢を一人で取上げますほどの奴、いつぞや五十兩のお金を戴いて返しましたも其男で、
 また今年の夏、月見舟のお伴を致しました節、川岸に待受けて、あのやうな御無禮を働さま

したも其男で、そも／＼水茶屋を始めて出す時に、根は戀と慾との兩道からで御坐います
 聊か世話になりましたを恩にかけて、はや妾ども母子を手に入れたやうな顔面、それは／＼
 朝夕に追廻されて、身を切られるほど嫌な事ばかり、一時は人の氣付かぬ遠い田舎へ影を隠
 さうかとまで『なるほど、其方の美貌で繁華の土地の客商賣を致して居つたなら、いづれ
 大勢の者どもが、そのまゝ捨て、置く筈もないにせよ、さて／＼其奴けしからん奴だな、しか
 し今、かうして居れば別に怖るゝ事も、うるさい事もないでないか』たとひ世間晴れての御
 恩を蒙りませすとも、これまでとは違つて、人に指でもさゝせる梅では御坐いませんが、何
 分に只今も申上げました通りの奴で、實は、おのれが身勝手の戀の仇と慾の的外れから、其
 ままた今年の夏の事も無念に存じて、竊に寢刃を磨いで居ります様子』はゝゝゝ、盲目は蛇
 に怖ぢすといふが、なるほど呆れた奴だ、しかし此家を存じて居るかな、また大林小三郎と

いふ事を知つて居る様子かな『いえく、まだ此家も、御身分も、お名前も、さらに存じて居らないやうで御坐いますが、おのれの子分とやらを、毎日々々四方八方へ出して隅から隅まで江戸中を探し歩いて居るとの事』む、其事を誰が申したな、其方また何者から聞いた』はい、それは妾の伯父、伯父と申しまして今まで逢うた事もなし、只その名ばかり聞いて居りました實の母方の義理ある弟で、勝蔵と申します者、もとは上州の安中に生れましたが、只今では兩國から淺草見付をかけて日本橋界限までを、町人の身で恐れ多い事で御坐いますが、俗に自分の繩張内と稱へまして、男が立つの立たぬのと其日々々を伊達に暮らすもの、上州勝、また敵に向うで二の足を踏まぬ鬼勝と仇名を取りますもの、ふと水茶屋へまゐりまして、ふしぎな事から互に名乗り合ひました間もなく、かやうに御恩を蒙つて家も店も一時に仕舞ひましたところ、その伯父がまた上汐の勘太とは年來の意氣地で、申さば同じ

土地で水の上の男と陸の上の男が睨み合つて居りますとの事、まして此ごろは妾の事を聞いて猶更ら互の張合が強くなりました様子、實は今夜も其の伯父が、そつと、まゐりまして、あの要助さんと入れ違ひに『む、先刻、要助と入れ違ひに出たといへば、ちらと月影に見た男、なみくより別けて背の高い大男であつたが、あれか、道理で、不思議さうに立止つて先方からも見て居つたが、互に近寄つて摺れ違つた時、無言で丁寧に會釋して通つたが』それ、それが伯父で御坐います、委しうは申しませんが、かねくお噂を承つて居ります折柄、お出會ひ申した場所といひ御風俗といひ、さてはと存じて、會釋いたしたので御坐いませう』『や、それならば逢うて談話をするであつたに、惜しい事を致した』いづれ、また其うち、お目通りを致させますが、今夜まるつて、伯父の申しますには、この夏の御手際を承つた以上、決して心配はしないが、さて敵手が敵手で、おのれが思ひ詰めた戀と慾の間違から下

種根性の一徹、どんな事をするかも知れない奴だ、また此方の御身分が御身分で、まさか白晝に相對喧嘩の出来る方でもなし、もし萬々一お名前にも觸るやうな事があつては、御恩をうけて居る汝が濟むまいから、今のうち願つて、お邸宅の方へ兎も角お末奉公といふ名でも上るか、それとも暫時、嫌でもあらうが、お暇を戴いて、どツか片田舎へ身を隠すか、いつれにしても第一汝が事の原因だから、つまり自分に罪がなくつても、物の成行に得てある習慣だ、御恩を仇でお返し申すやうな事にならないやう、こゝは何とか能く考へて、汝の姿を彼奴等の目の届かないところへ隠すが宜からう、その代り後は乃公が引受けて、この事の餘炎が冷めた時分、世間の人に聞かれても宜い男づくの喧嘩を仕掛けて彼奴を片付けるから安心せい、全體あの勘太め、たゞさへ捨て、置けぬ奴だが、時も時とて、こんな事のある折柄、男を磨く家業で妙な風聞が立つては面白くないばかりか、もし乃公が一料簡で仕掛け

た事を、蔭で汝の方から糸を引いて居るやうに聞えては、これもまた、やはり筋を傳うて御身分に觸ることだからと、かやうに申して歸りましたが、む、その上汐の勘太といふもの、いよく以て怪しからん奴だ、恥辱も義理も辨へぬ下種根性の習慣で、世間に住々ある事、おのれが懣と愆の間違ひから却て執念ぶかく仇に取るといふならば、まだしも、それがため、身の分際も顧みず麻刃を磨いで武士を覘ふとは小癩千萬な奴、覘はるゝまでもなく、ひッ捕へて打斬るも易いが、さて其方の伯父がいふ通り、身分柄、まさか白晝に相對喧嘩も出来まい、いやはや思ひもよらぬ困つた奴に出逢うたぞ、それも皆、もとは賤しい家業を致しました妾の身から、今更ら何と申上げて宜いやら、なるほど伯父の申す通り、こゝは妾さへ自分の不運と諦めて悲しい目を致しますれば濟むこと、暫時お暇を戴きまして田舎へでも、は、は、は、誰が何と申しても、いかなる者が遮つても、其方を捨てぬといふは、こゝの事、まして今き

く如き奴が、どれほどの妨害を致さうとも、梅、怖るゝ事はないぞ、家名と身分を思へばこそ進んで手は出さぬが、もし萬一の事あらば更に容赦はない、無禮討だ、なるほど其方が屋敷へ來たいと申したのも、これがためか『はい、實は、さやうで御坐います、あのやうな奴に迫詰められて、折角かうなつた自分の戀を割かれた上、悲しい田舎へまゐるよりは、たとひ人目の關にせかれながらも朝夕お顔の見える御奉公が致したいと存じまして』は、しかし梅、それは兎も角、いつまで其方を此まゝ此家に置く氣ではないぞ、もし屋敷へ呼ぶならば、男とは違ひ女は氏なくとも假親、假家など申しての、強ち奉公人にせずとも、また呼ぶやうに致して迎へる工夫もあるから、まづ暫らく時節を待つが宜からう、かねて申し聞かした通り、父は現在まだ役儀を勤めて隠居の身分でなし、兄は今のところ別に知行を戴いて御城に勤めては居るが、いづれ父の死後は兄が世を取るべき筈、さすれば次男は分家か他

へ養子にまゐるか、こゝが身の定まる時、まづそれまでは梅、このまゝ氣樂に致して居れ、其方がある以上、たとひ國司大名から貰ひに來ても養子は飽くまで禁物、もし父も兄も分家不承知とあれば、はゝゝゝ二人で世を安く浪人住居が結句、面白からう、しかし斯やうな時に母でもあれば、そつと餘所ながら其方を見せて、また何とか今のうちに仕様もあるが、さて幼少に別れて物堅い父と嚴格な兄の手前、打明けて言出したところが却て、えいッ、成行次第だ、互の氣さへ變らずば梅『それほどまでに、この妾を、承れば承るにつけて猶更ら、行末の御出世にも觸りますやうな事ばかり、えゝもう、いッそ、最初から御目にかゝらなければ、何故あの時、軒を並べた水茶屋が十二軒も御坐いますに、妾の店へ』は、また始まつたぞ、十二軒あるに致せ、其方が店と知つて飛び込んだ譯でもない、あれが縁といふものさ』その御縁が今更ら、恨めしう存じます、あの時に御縁さへなくば『縁さへなくば

却て、宜かつたと申すのか「ほゝゝゝ善いか悪いか、妾には分りませんから、上汐の勘太に聞いて見て御返事を致しませう」や、此女め「あれ、お袖が火鉢の中へ」はゝゝゝゝ焼かれるとは全く此こと、あはゝゝゝゝゝゝ」。

其三

すはや一年中の油断大敵め、今この時に押寄せたりと、あはれ質草の種も盡きたる空大名、わつと俄に狼狽へて立騒げば、寄手は得たりと其機を外さず、追手搦手より一時に閑の聲を作つて矢の催促寸隙もなく目玉と算盤珠の總勘定を放ちつゝ、大晦日の峠を切所として互に討ちつ討たれつ戦ひし浮世の大騒動、叶はじと妻子の手を引いて落行くもあり、馬武器を失うて赤裸武者となりながら踏み止まるもあり、そのまゝ親重代の城を枕として無念の討死するもあり、さてはまた餘所の矢叫びを聞きつゝ春まつ心長閑に年を送るもあり、ことし一年の寶

を數へて肥えし身代を喜ぶ家もあり、けに人間の苦樂さまざま吉凶いろく、泣くも笑ふも只この時と凄じかりし世の中も一夜あくれば新玉といふ和睦の聲に敵味方うちとけて、天下泰平こゝに祝ひ壽く正月の三日、下戸さへ屠蘇と呼び換へ平生の無沙汰も互に出逢うて笑話きつゝ、白晝は巷間を馳せ違ひ往來ふ禮者の物音に絶間なけれど、夜は一入さらに常よりも淋しく、まして江戸名物の筑波おろしか武蔵野風か、八百八町の蔓を吹いて音高く、空には星影もの凄く闇の縫目に漏れて通ふ人氣もなし、されど身に浮世の煩累もなく戀に心も勇みて妹がり行けば冬の夜の肌寒からぬ大林小三郎ただ一人、例の要助をも召連れず星明りを便りに無提灯のまゝ、麴町の方より平河町の天神門前まで來かゝる折しも、一人の大男また彼方より來りて、をりく背後を振り返りつゝ人や追來るか透し見る體、何をか思ひけむ小三郎そのまゝ軒下に身を倚せて窺へば、かの男いよ

く見返り勝に歩みしが、果は俄に立停まりて憤怒を含める聲、中音なれど太く冴えて闇に響き渡りぬ、やい、うぬア何だ、この寒中に音もねエ徒跣で人の後を見え隠れに蹶けて来る奴、大晦日に生残った半亡者か一夜あけて湧いて出た物貰ひか、但しやア間盜か追剝か面ア見せろ、いひつゝ身を捻つて足踏み鳴せば、四五間ほつと彼方の闇に紛れて五體は見えねど胸の一物おのづから現はれぬ、晝でも夜でも天下の往來だ、先に立たうが後から行かうが勝手次第の市中を何のこつた、をりく振り返つて氣にする奴こそ間盜か追剝か面ア見せろ」

「はゝゝゝいよくお里を現はしやアがった無宿野郎め、賣言葉に買言葉ア互に面を見合つた時の文句だ、闇の中で賣も買もあるもンか、身に缺點がなきやア黙つて通りぬける、もし用でもありやア名乗つて来い、乃公ア江戸の男數に肩を並べた上州勝といふもんだ、わるく動きやアがると爲にならねエぞ」上州勝が野州勝が知らねエが、この脛ッほしは親ゆづりだ、

他人の指圖で進退はならねエ、黙つて通りぬけるも抜けねエも餘計な世話だ」はゝア讀めた、この鬼勝が今夜どこへ行くか、その穴を探つて来いといはれた上汐の飛沫野郎だな、はゝゝはゝゝア附いて来い、まだ三四里もあるところだ、ほのくゝと夜の引明際に面ア見た上で朝酒の一盃も飲ましてやるから、いひつゝ更に油断せず、胴金巻の腰の脇差揺直して、わざと其まゝ天神横町を打過ぎつゝ、およそ一町あまりも行きしと思ふころ、きやつと叫びし闇中の一聲、驚いて振り返るや否、星明りに透して見れば、別に一人の男が手に持てる一刀きらりと光りて我を呼止めぬ、「これくゝ上州勝とか申す人、こゝ構はず引ッ返して、ゆく家へ行かれたが宜からう、あとより一人、すぐまた行く者が、はゝゝゝ上州勝さてはと思つて二歩三歩そのまゝ近づきながら、星明りに中腰となつて會釋しつゝ、「たつた一聲の往生、お手際のほど恐れ入ります、這寄つて御刀の血でも拭きます筈で御坐いますが、まだ御意も得ません

拙者、わざと此まゝ御免下せエまし、ぢやア一足お先へ、いづれ後刻あらためて」

一夜あけての春とは名のみ、冬の夜の身に染む戀も寒さも人しれぬ浮世の忍びどころ、例の離れ座敷に大林小三郎と上州勝と只二人、わざとお梅は座を避けて我身の事を聞かじと母屋の方へ行きぬ、

なるほど當時旗本生育の若様風、まして忍ぶ戀路に通ふ二十四の部屋住といへば、宵闇の薄の穂にも驚くべき初心の優男に聞ゆれど、じろりと物を見る眼中に凄みを帯びて、筆端の跳ねたる如き眉尻、かたく一文字に結びたる肩端、厚鬢の大髻を惜しけもなく引絞りて、肉は肥えざれど流石に鍛へたる五體の骨節おのづから寸隙もなく、をりく漏す片頬の笑渦に愛著の露は含めど、きつと身を定めて思はず立直す額際には、八幡きかぬ氣の一徹を現はして何

新も許さぬ血氣の體、これぞ世にいふ殿様鐵火、いかに自然の縁とはいひながら選みも選んたり流石お梅の戀男、まことに似たもの夫婦ぞと今更らに驚けば、小三郎もまた上州勝を見、高が蒼間の春風に鳴る奴風、立つの立たぬと何の男がと思ひの外、ちらく鬢に霜降る心の秋に分別ありけの面魂、しかも五尺七八寸の大兵に浮世の場数を經たる目鼻の働きやう、まこそ膽魂も一癖あるべく、善にも惡にも思ひ込んで進まば此奴たゞの男で濟むまじと、互に目を敬て、心に首肯きぬ、

「お初に御意を得ます、かねて梅から、お聞き及びも御座いませう筈、拙者は彼の伯父の勝藏と申しまして、しがねエ境涯で其日々々々を幽かに送りますもの、また先刻は思ひもよらぬ途中と申し、大方、それとは存じて居ながら場合が場合、却て無用の御目觸りにも相成りませうかと、わざと差控へて居りましたが、いやはや、お手際のほど恐れ入ります、お召物

に血痕は『いや、術もない奴の不意を打って据物斬に致したから、血痕も何も、はハハハハハしかし過日も梅から委しう聞いたが、今夜また現在あの様子では、その上汐といふ奴、いよく前後も辨へず狂って居ると見えるな』へエ、全體、あの水茶屋を出します節、もしこの拙者が存じてさへ居りますれば、及ばずながら、あのやうな奴に見向きもさせる筈ぢやア御坐いませんが、何分、ふしぎに伯父姪を名乗り合ひましたのが其後の事で、實に残念に心得ます、しかし、あつて過ぎた曉、申さば梅が自分の身から出ました事で、それを今更ら、お耳へ入れては私が濟まぬ二度お目通りが出来ぬ、折角の御縁これぎりになつたら死んで仕舞ふ前に伯父さんの咽喉笛へ喰ひ付くなど、申して、はハハハハ一途に恐れ入つて心配ばかり致して居りましたが、何をいふにも相手が身の軽い無法な奴で、加之も思ひ詰めた戀と慾との兩道がらりと外れた破れかぶれの一生懸命、どんな事をするかも知れない折柄、もしや萬々一、御身

分に觸つちやア却て猶更ら恐れ入るから、今のうち委細を打明けて申上げる方が宜からうと、かやうに拙者が言ひ聞かせまして『はハハハハそれほど心配する事でもないが、さて其まハハにも捨て、置けぬ奴、何とか工夫せざるまいの』さやうで御坐います、こゝで自分が姪の事を申上げちやア恐れ入りますが、元來あの梅が性質、まづ世間に並べて年の割には、さのみ根からの白痴でもなし、また物に驚いて狼狽へませぬ女で御坐いますから、もとの身でさへ居りますりやア、たとひ上汐の勘太奴どれほど募りませうとも、どうか斯うか自分で自分の一料簡、すつと外して柳の風に受ける分別も致しませうが、只今ぢやア、かやうに有難い御恩を蒙つて居るのみか、第一が自分の戀の弱身から、はハハハハハどういふもんか近來は萬事却て小兒のやうに相成りまして』『はハハハハハさうでもない、なか／＼梅は心の確な女だ』『いくら氣が張つて居りまして、女といふもなア心の頼りが出来ると、急に弱くなつて、

いやもう、たはいが御坐いませんから、いづれ御意に觸るやうな愚癡も無理も申し上げませうが、何分まだ、あの年で萬事が不行届きの上、生涯たゞ御一人を力に致して居ります女の事、どうか行末ながう、お見捨なく願ひ上げます、何の御縁か、吹けば飛ぶ水茶屋風情の賤しい家業で、御身分柄と申し御人品と申し、實に彼女は思ひがけない幸福者で「いや、あれまで人の騒いだ兩國の名物としては、高が二千石の次男、ちと喰足るまい、僥倖か不幸か分らない事だ」お言葉、痛み入ります、なほ此上のお願ひには、よし奥様をお迎へに相成りませうとも、どうか彼女だけは、あのまゝで、末長くお目かけられますやう、もしこれが我々同士の慣れた言葉で、ひらつたく申し上げますりやア、打明けたところ、慾も利もねエこつて、なアに母子二人ぐらエは此伯父が臺所の端でも養つちやアやるが、實ア本人の心を汲んで野暮のねエところ、死ぬまで惚込で戀の本望を飽くまで遂げさせてやりてエばかりさ、時と場合ぢ

やア随分これまで摺つた揉んだと前後左右から故障が湧いて出て、むづかしい他人の戀中でせエ一息に結んでやつた男だ、まして彼女ア乃公が一人の姪だア、はッは、とまづ斯やうな次第で御坐いますから、不束なところは幾重にもお叱り遊ばして、どうか此まゝ、末長く、願ひ上げます」は、と、その言葉は談話が早くて理に近くて面白い、其事に就いては過日も梅に申し聞かした通り、もはや妻帯は致さん覺悟で、たとひ浪人しても二人もろとも落ちて暮さうと、は、と、馬鹿な事まで打明けての「いや、その御一言は何より、どれほど本人が喜びまして御坐いませう、恐れながら、御縁の端に縋ります拙者までが、此上もない大慶に存じます、以後は何卒、御家來同様に思召して、御用を、御用といへば上汐の勘太め、彼奴いかゞ致したもんで御坐いませう、貴方様や拙者どもならば、たとひ闇の夜の脚下から不意に飛び付いても高が血迷つた舟乗奴の三人五人、しかし世諺にいふ道具外れの急所で、彼

奴が一生懸命に規ッて居ります的が梅で御坐いますから、彼女に萬一の怪我をさしては、いかにも無念に『されば梅に萬一の事あッては取返しがならん、しかし今夜の様子では、我々は諸置き、まづ梅の居所を探ッて居るやうだな』さやうで御坐います、承れば去年の夏お月見の時、お手際は存じて居ります上に、また拙者には眞正面から手も足も出せない奴、そこで彼奴いよく苦しまぎれの焼腹を絞ッて、本人の梅を何とか致す覺悟で『む、それに相違ない、ところで梅を如何いたしたものであらうな』そこで御坐います、甚だ恐れ入ります、暫時の間、お邸宅へ、勿論、拙者が親元と相成、貴方は更に御存じのない體で、お腰元にも差上げましては『さ、其事に就いて、先夜も梅に申した通り、もし邸宅へ呼ぶならば後日のため奉公人として入れたくない、こゝ兩年も経てば必ず父が隠居せられて兄が世になる筈、さて其後に次男の身が定まるといふもの、同じくば身の定め際に梅を呼びたい、

假親假里は往々ある事と急いては却て互ひの爲に宜しくなからう』こりやアまた冥加に餘ッた御意で、たゞ恐れ入りますばかり、たとひ、たとひ萬一、萬々一さやうの思召が御坐いますとも、その事は暫時、梅に御意遊ばさないやうに願ひます、もし、そんな事を夢にも知りました以上は、何と申しても女の淺い心で、嬉しさの餘り氣が取上せて、却て本人の身のために相成りませんから』は、ムムム、もはや梅に、打明けて仕舞ッたぞ』や、これは少々、早まッて御馳走を遊ばし過ぎたかと存じます、しかし其御馳走を戴き過ぎて食滞いたしましたせぬやう拙者がまた、よく申し聞かして療治いたさせますから、は、ムムムとところで差當ッて梅の身、さういふ御意を承る上は猶更らの事、いよく以て彼奴等風情に指一本でも『さ、せない工夫を』及ばずながら、この上州勝いや勝藏が確と受合ひました、いづれ改めて梅より委細の手筈萬端を申し上げさせますから、まづそれまでは一切お竊やかに願ひ上げます』よ

ろしく頼むぞ、途中などで萬一の事あらば幸ひ却て斬捨てるも易いが、さて自分わざと押掛けて何とも出来ぬ奴だからな』は、は、は、は、仰せの通り俗に申します銀と鉛の目分量、お慰みにも致せ、あのやうな奴には、なるべく、お避け遊ばす方が結果の御勝利かと存じます』は、は、は、は、遁けるが勝といふ兵法かな』拙者として、路傍の非人に追はれちやア三十六計の奥の術、向脛に馬の字を書いて駈出します外には、は、は、は、しかし、この寒氣の厳しい夜中、いつまでも御意を得ましては却て恐れ入りますから、これで御免を蒙ります』む、それは兎も角、先刻のやうに蒼蠅い奴が附纏ふ折柄、大丈夫とは存するが、途も遠し夜も更けたるのみか、あの死骸の事で辻番や町内の者どもが立騒いで居るところへ』なるほど、ちやア今夜は大事を取りまして、母屋で一夜』それ、泊ッて行くが宜からう、いづれ明朝あらためて』梅は只今すぐ伺はせますから、彼女め、自分の事と存じて、わざと差控へて居りましたので、は、は、は、は、

庭を隔てし奥の離亭には樹間がくれの窓を漏るゝ燈火の影、終夜の戀に何をか私語きけむ、母屋の方の一室には上州勝また一室には母親と下女、三方いづれも思ひくの夢を結びて、いつしか明放れゆく東天の空に鴉の一聲二聲、やがて軒の雀も囀りて、きぬくの別れに憎やと唄ふ鐘の音もこゝには壁一重の天神に朝參詣の柏手うって鈴の音ちやらくくと聞えつゝ、はや要助が迎ひの體に小三郎そのまゝ起出づれば、母も上州勝も戸口に迎へて送り出す背後より、鬢の毛の一筋二筋みだれかゝりて冬の夜長も短かしとぞ思ふお梅が風情、戀の迎ひの要助が顔じろりと恨めし氣に睨めば、おもはず首を縮めて袖の下より掌を合しつゝ、何をするかと主に吐かれて其まゝ立去りぬ、

あとには上州勝とお梅、そのまゝ伴うて奥の離亭に差向ひながら、戀の空巢を覗ふ曲物ならねど、互に心と心とに示し合ふたる胸の一物、餘所へは漏らさじと膝らを進め聲を潜めて打語りぬ、

『本物と風聞ア四分六か七三が世間普通、かけで聞いだばかりぢやア、まさか、あれほどの男振とも思はなかつたが、ありやア全く風聞よりも本物だ、なるほど白むく鐵火の名物女が戀の只中、無理のねエところだ、しかし、あんまり只中に陥り込んで無理の無過ぎた結果、例の謀反を忘れて仕舞ツちやア困るぜ、四十面さけた上州勝が骨折損の草臥れ儲け、上汐の二の舞になツちやア立たねエからな、は、は、は、』
『ほ、は、は、』
いくら妾が初心だつて、まだ其處までは性根を取失ひませんから、まア安心して下さい、しかし前夜は『萬事が上々首尾の山かづら、うまく傳つて乗り越えたがね、なか／＼外貌の男振ばかりぢやアねエ、ものゝ分別に寸

隙がなくて總てが確りしたもんだよ、同じ邸宅へ入れるなら奉公人として入れたくないから、こゝ兩三年の後この身の定まる時まで待てといふのさ、もし悪く考へりやア、まだ肌の手許せねエところがあつて、その兩三年の間に篤と此方の氣性を見抜く決心か、但し口が心なら却て僥倖だ、なまじひ窮窟な目をして嫌に手数のかゝつた梯子段を上らねエでも、いはゞ一足飛の玉の輿、たゞこゝに親御がまだ隠居しねエで兄様といふのが別に役を勤めてるといふから、ちと待遠いやうだがね』
『なアに二年が三年、よし五年でも六年でも、此方の黒いところを睨まれる氣遣ひは、ほ、は、は、』
却て日が重なれば重なるほど深く引入れるだけの事は、及ばずながら妾の腕で、腕というては何だか憎らしいやうですが、まづ其處は互の情といふものでね』
『さのみ憎らしうもねエがね、水茶屋女が戀の片手に二千石を掴まうといふなア餘り情があり過ぎて可愛らしうもなからうよ、は、は、は、』
こゝろで差當つて上汐の野郎、彼奴ばかり

は嘘も掛引もねエ全くの困った奴だよ、前夜の約束ちやア兎も角この鬼勝が受合ッて引受け
 たんだが、さて始末に終へねエ狂氣さ、今こゝで呵しな間違ひでもあッちやア萬事の失敗だ
 からの『さア妾も其事がね、何とかして』何とかせざアなるめエよ、しかし、妙な意氣張で今
 年の二月まで互ひの男づくに手が出せねエ事になッてるから、もし其間に此家を見付けられ
 ちやア『いッその事、もう遁け隠れもしないで、妾が此家へ立派に呼寄せて見ませうかね』
 『呼寄せる、呼寄せて全體どうする決心だ』どうも斯うもあるもんですかね、呼寄せて酒でも
 出した上、いくら飛んでも跳ねても今は人の花だから過去った昔の夢と萬事を男らしう諦め
 て下さい、もしまだ未練があッて、それほどまでに妾を思ッて下さるなら、逆も通れない苦し
 まぎれに言ふではないが、その執念深い凄いとこをを買ッたお梅、濟まないこッたが今の且
 那を何とかして妾の身を取ッて下さいと、かう打出した方が却て宜からうと思ひますがね、つ

まり盗賊は金で、自分の事をいうては呵しいやうですが、かけで蹂躪るほど憎くッても目に
 見れば惚れた戀の慾目で、根が妾を斬りも突きもしたくないのですよ、ほゝゝゝよし分ッ
 た其料簡なら乃公も男だ、相手の武士を片付けて主のない花にした上だと、言ッたところで、
 なかく、齒が立ちますまい、また此方の氣を探る證據に手引しろといへば、する風で、そッ
 と旦那へ吹込んだ上、いよく助からない瀬戸際に落してやりますさ、また一事には、お梅を
 探し出した後に男づくの勝負をするといふんですなら猶更の事、こゝは親方、一番、踏込ん
 働いて戴きたいので、妾が逢ッた以上は、どの道とも、お二人の手にかッて死ぬ奴ですか
 らねエ、ほゝゝゝ『なるほど、こりやア驚いた、いやさ、あけて今年やうく十九のお梅さん
 に浮世の場数を踏んで来た四十面の鬼勝が驚かされたよ、その細い眞白な咽喉から今のやう
 な圖太エ料簡が出るんだもの』ほゝゝゝこんな生優しい手ぬるい事で驚かれちやア、こ

の心が細くツて『ぢやア差當ツて、まだ何か心太エ事があるのかね』別に、太い事でもないんですが、乗かゝった舟に帆を孕んだ事の序ですから、も一人やツて貰ひたいの『も一人、やれたア全體、誰のこつた』ちと勿體ないやうですがね、二千石の世取の、お兄様を『えッ』
 『腰元奉公でも構はない、妾が邸宅へ這入りさへすりやア、今の本人よりも第一まつ親御の心から動かして、兄を御爲ごかしの分家、次男を世取にするだけの活動はして退けますがね、こゝ、兩三年も待てといふ有難迷惑ぢやア少々、待遠ですから、いッそ、今のうちに兄様を無
 いものにして、親御は自然の御隠居、あとの二千石を戀男に取らして妾は一足飛に乗込みたるのみで、これが何萬石といふ大名ぢやアなし、實は慾ばかりでないんですよ』む、其處まで度胸が据ツて居りやア乃公も上州勝だ鬼勝だ、もう驚かねエ、呆れも驚きも通り越して感

心の上盛だが、そいつアお梅さん、少々、脚下の運び方が慌て過ぎるやうだぜ、まづ暫時こゝは早まるところでねエさ、よく考へて、時機を見て、外れねエ圖星を射抜くやうに、つまり敵を殺さねエで勝鬨をあける工夫が戦鬨の上手といふもんだ、また物の道理を言やア、罪のあるねエは兎も角、たゞの一度も逢ツた事のねエ者を闇討にするなごア本惡黨のする仕業ぢやアねエ、さうなると女ア却て氣短の一徹で怖ろしいよ、しかも現在の戀男の兄様ぢやアねエか、なるほど、その氣性だから、慾も利も捨て、自分の惚れた男を日蔭に置きたくなエ一時も早く世に出したいといふ、それも根は男の可愛さ餘った情から起つた事にもしろ、あんまり手厳しいぜ、しかし、よくまア惚込んだもんだね、お梅さんの五體は死太エ度胸と凄
 い嘘八百で固めた中に、戀は身を喰ふ曲物、こればかりは本當の弱身だよ、はゝゝゝゝ』ほほゝゝさう聞けば妾が悪かつたから、そんな寢覺のよくない事は廢めにしますがね、いづれ兄

様の譽め者にはなれませんよ』そりやア知れ切った事さ、怨まれたり憎まれたりするくれエの覺悟ア宜いが、化けて出られるやうな事アまづ考へもんだ、よし百人の相手を叩き斬っても疊の上で死ぬ奴と、たゞの一人を殺しても三尺高い木の空で萬人に生首を曝す奴とあるのが、こゝのこつたから、度胸に委して、あんまり酷たらしい事アするもんでねエよ、はゝゝゝゝ乙な縁で同じ道伴になつたから思つた事を隠さねエで言ふんだ、悪く聞かれちやア困る、まア年齢に免じてね、耳に入れて置く方が宜からう』なるほど、よく分りました、此後とも氣の付く事があつたら、どうか遠慮なしに叱つて下さいよ、かりにも伯父姪になつてるんですから、ところで、今いうた上汐の事だけは』おツと、そいつアよし、妙だ、野郎なンざア、どの道とも遅いか早いかな年貢の納め時が来る奴だ、まして言はゞ彼奴から乗かゝつて来るんで、根も葉も残らねエこつた、萬一の用意に乃公も其時は忍んで立聞きするから、そこでこそ思

ふ存分に舐めてやるが宜い』しかし、安心して來ませうかね』當然に分別のある奴なら、見付け出しやア兎も角、呼寄せられて來る筈はねエが、重なる怨恨と嫉妬に血迷つて前後の思量もねエ闇雲飛乗の野猪武者だから、きつと狼狽へて來るに相違ねエ、どツか此邊の町小使でも頼んで、實ア内々で話したい事があると言込むのさ、それも外の野郎に漏れちやア無効だ、そツと本人の勘太だ、一人の耳へ、後日に證據のねエ口で言ふこつたから少々お世辭を並べて、今までは妾が悪かつたくれエの情合を含ませるさ』ほゝゝゝ考へると、何だか可哀さうなやうですなエ』はゝゝゝ急に優しくなつたもんだね』

其四

平生より互の胸を明し合うたる間、まして此ごろは取別け力と頼みし五人の中の一人、ゆうべ三日の宵闇に紛れて立出でしまゝ、更に歸らねば、上汐の勘太おもはず眉を擧めて小首を捻

りし折しも、平河町の往來に斬捨てられたる死骸は舟乗の體ありとして第一に勘太が許へ觸書を廻されしかば、もしやと走せ出でて一目みるや否あつと驚いて無念の拳を握りつゝ、さてはと思ひしが、眼前それといふ證據もないのみか、追て詮議すべきも餘り美事の手のうち武士の辻斬か試し斬なるべしといふ役人の手前、逆も返らね骨を抱いて惣ひ賣込みし男を潰さむよりはと、無言の涙を呑んで死骸を其まゝ引取りしが、いよく怨恨は五臟六腑に染み渡つて皮肉を躍らしぬ、

されど兩國に住むものが思ひもよらぬ平河町で斬られしは不思議の第一、その道の目に斬口を見て武士の手のうちといひしからは鬼勝でもなく、さては規ひし例の片相手に規はれて不覺の返り討に逢ひしか、もしそれとすれば平河町こそ忍んで通ふ戀路の穴のお梅の隠れ家、ないにせよ遠くはあるまじ、おのれ其界限の草の根を分けても見逃すものか、一軒々々軒竝

びに漁つて引摺り出さむと思ふ折しも、見馴れぬ一人の男が入り來りて我名を呼びしかば、何事ぞと出でて問ふ間もなく、一封の手紙を差置いて其まゝ駈出しぬ、

はて不思議な奴と、取上げて見れば女の筆ながら正しく我宛名に、いよく訝りながら封おしきれば、一枚の紙の端に何の文句もなく、たゞ平河天神の横町お梅といふ九字あるのみ、流石の勘太あつと呆れたる面體に怒憤の兩眼ぎろく、遙に戸外の方を睨み詰めて大息はつと吐きぬ、

今まで人目を忍んで匂ひも漏さざりし我身の居家を、血眼になつて日夜に探し廻りし其鼻頭へ、ぬつと差出せし今日の手紙の封おしきつたる面體いかなりしぞ、おもへば木でも石でも動いて飛び上るべき筈、まして怨恨と嫉妬に本性を取失うたる男、たとひ一度は呆れて怖れ